

北大山岳部部報 9号 別刷

チャムラン峰登頂報告

北大山岳部



ホングコーラ B.C 附近より見たチャムラン南西面

北大ヒマラヤ遠征隊撮影

# チャムラン登頂

1962年ヒマラヤ遠征隊報告



隊員及びシエルバ

正規に雇用したシエルバ

サーダー：バサン・プタールIII, シエルバ：アン・ゲルブ, コック：アン・ノルブ,  
 シエルバ：ラクバ・ゲルブ, ラクバ・ツエリン ローカル・ポーター：ブルキバ, バサン  
 ・タルケ, ニマ・ナムギヤル, その他はポーターとして特別に雇用を依頼  
 された。(ベースキャンプにて)

- |                              |                            |
|------------------------------|----------------------------|
| ラクバ・ゲルブ                      | 鈴木良博                       |
| アン・ノルブ                       | 小村年                        |
| アン・ゲルブ                       | 中野征紀                       |
| バサン・タルケ<br>バサーダー<br>バサン・プタール | 岡本丈夫                       |
| リンジン                         | リエイゾン・オファイサー<br>マニク・トゥラダール |
| ラクバ・ツエリン                     |                            |
| ニマ・ナムギヤル                     |                            |
| ブルキバ                         | 久木村久                       |
| カミ・バサン                       | 永光俊一                       |
| カルマ・ツエリン                     | 安間荘                        |



登路に用いた氷河 (第一キャンプサイトから)

それは、一見険悪に見えもした。しかし、その期になって、恐怖や、敬遠は憎らしい。  
我々は此処に挑んだ。



### 第二キャンプと第三キャンプの間で

或る種の正体不明のエクスタシーが全身をつつぱしているのを感じとられるのは、此んな時なのだ。しかし、我々は、そのあまりにも大きい、1つの抽象の世界の端役にすぎなかった。それに思いが至ると、突然今度は耐えられないほどの寂寥にうちのめされそうになるのだ……………

### 第三キャンプから第四キャンプへ

時には50度を越しそうな硬氷の斜面のトラバースが続く。  
緻密に充実しきってしまう心と肉の一瞬……………。



### 第四キャンプの上

人は、「わあすごい」と言う。それから「何故？」と聞く。  
しかし、我われにも定かではない。  
此の尾根を登ったということ以外は……………。

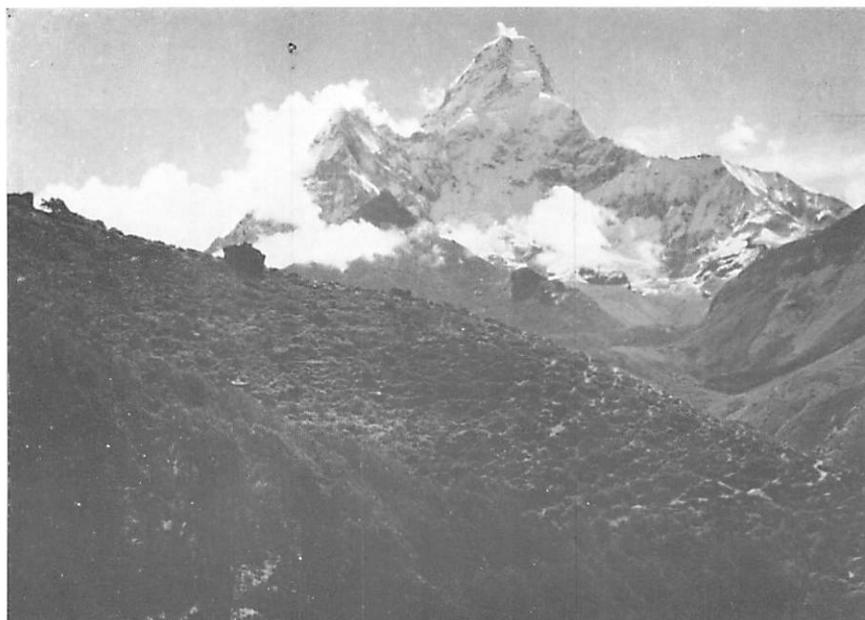


第二キャンプサイトから、ホング・コーラ対岸のP41峰

向いの山ははっきりなしに音がした。その度に雪煙が立昇った。其処は死の臭がした。

バンボチエから  
アマダブラム峰を望む

此んなに間近く、此んなに鋭い  
山が迫っていると何故か、目を  
そむけたくなくなってしまうもの  
だ……。



バンボチエから  
カンテガ峰を望む

「此の頂には、神が棲む」と  
土地のシェルパの一人が言っ  
た。

「あの山は登れない」「登っ  
ちゃいけない」と又他の老人  
が言った。 ；



頂上で旗をかかげるパサン・プタール

## I. 遠征計画並びに準備

中野征紀・岡本丈夫・相川 修

海外遠征——と言う魅力的な言葉、しかもアルプス又はヒマラヤと発音される快い響きは昔から岳人の憧れの象徴であった。

我々も亦其の魔力の擒となるには吝かではなかった。そもそも北大山岳部がそのスキー部から分離したのは専ら未知の山々への魅力にひかれたものであり、特に北海道特有の厳冬期の登山が止むにやまれない目標となつたからだ。北海道の中央高地、続いて日高山脈の厳冬期登山、それも山小屋を基地として出掛けるのではなく、天幕を出発点とする雪中登山、それこそ最も男らしい登山形式と言えなかつたらうか。

それには基礎的な登山訓練を経なければならぬし、スキー合宿の充実を心掛けることは当然であり、岩壁にすら挑んで見なければならぬ。其の意味に於いて北大山岳部の設立当初の先輩は、単に札幌近郊の山々に、積雪期スキー登山を行なうことでは満足出来なくなり、より高く、より遠くへと出掛ける為に或一つの根拠地から出発する登攀を望むようになった。それが札幌近郊に純スイス風のヒュッテの建設となり、続いて石狩川の仮小屋作り、戸蔭別川上流の掘立小屋の組立の構想が生まれて来たのもであった。

又一方冬山合宿もニセコ連峰を踏破するものでは物足りなくなり、十勝岳吹上温泉に基地を求め、其の急峻さ、ゲレンデの豊富さに加えて専ら零下20度以下のスキー並びにアイゼン登行に主力が注がることになった。次いで森林限界以上の吹き暴しの尾根上のキャンプ生活が試みられ、更に厳冬期の岩壁登攀の訓練として昭和2年赤岩が試みられたことは、当時としては画期的なものであった。

その数年間十勝岳連峰に於いての合宿訓練から、冬期登山のあらゆる経験が積み重ねられ、次の目標は北千島へ、北アリューションへの進出となり、いずれも見事な成果を収めたことであった。丁度其の時代であったが立教大学山岳部でナンダコット遠征登山が計画され、それが輝かしい成果を挙げたのだが、其の頃エベレスト、カンチェンジュंगाのジャイアンツは及びもつかないが、少なくとも其の周辺の山を目標とする気運が我々の部でも考慮された。ポーラメソッド輸送法の実施訓練、カマボコ型天幕の考案と実用性の試験、和製ピッケルアイゼンの試作とそれらの実地検討、オーバーシューズの試用等々幾多の努力が積み重ねられて行った。

所で残念なことには其の時から満州事変、続いて支那事変、大東亜戦争が次々と続いて勃発したのであった。所謂大東亜圏内では我々の意欲を満たす地域はどうみても見当らない。僅かに北部樺太の厳冬期に寒地作戦の研究資料にとギリヤーク、オロコ族の寒地食の調査に犬糧を使ったり、興安嶺に調査旅行に出掛けるのが精一杯であった。そしてビルマのインパール作戦が成功裡に進捗している時にはアッサム、ブータン地域が身近く感じられて秘かに欣んだりもした。又ニューギニアの大雪山の上空の入道雲をファクファクの海岸より遙かに眺めて山そのものは視野に捕えることが出来なかつたが、考えられる其の高度に羨望の意を燃やしたこともあった。

曾て終戦後現役の連中は海外遠征に備えて厳冬期の十勝連峰、大雪山麓の全山縦走、更に日高山脈の冬期全山縦走を行なうことにより其の實力を養成し、第1次、第2次マナスル登山隊員に山崎英雄君が、第3次マナスル先遣隊には橋本誠二君が選抜され出掛けたものであった。又第2次マナスル遠征隊の出たころ伊藤秀五郎氏がヒマラヤ行きを計画したことがあり、隊員候補の人選も進み、北大はじめ関係大学の学長の了解も得、榎さんを通じて日本山岳会とも連絡をとり、実現の可能性も濃かつたのであるが、主唱者伊藤氏の公務上の都合で遂に流産の憂目に会って仕舞つたのは、かえすがえすも残念なことであった。しかし一方第1次南極越冬隊員中に中野、佐伯両君が、調査隊に小林君が選ばれ派遣することが出来たのは、遠征に対しての計画上一大偉力を加えたものと言えよう。

それと並行して、又それに刺戟されて此処数年間現役部員の間でヒマラヤとアラスカ方面の遠征に多大の関心を持って独自の研究が進められていたのだが、次第にその目標が濃縮されてきて、西北ネパールに注意が向け

られるようになった。其の結果、昭和34年も押し迫った頃、現役の数人が在札先輩の所を訪れ、西北ネパール(アビ・ナンパ・サイバル山群)遠征の計画を提案して、其の実現性の妥当可否について相談をもちかけた。先輩にとっては余り突然な気がしたが、其の熱意は認められた。次第にその目標が濃縮されて来て西北ネパールに注意が向けられるようになった。

其処で11月20日であったが、山の会の臨時総会を開いて計画の検討を行なった。其の時が今回の遠征具体化の緒と言えよう。更に爾後数回にわたって山の会幹事と現役部員代表とが集って話合ったのだが、資料の整備計画の具体性、遠征隊の性格、遠征費用の問題について先輩と現役部員との間で考え方の相違が顕著であった。即ち遠征目的に対する事前調査、準備をどうするのか、資金は自費で賄うのか、寄附援助に頼るのか等、又登山のみを目標の遠征か、学術調査を兼ねるのか、学術調査を主体にすれば研究目的に適った権威の加わる可能性があるのか等々。

これらの意見を統一検討するには委員会を設ける必要があるとの結論が出されて、一応委員会が構成されて竿頭更に歩を進めることになった。

其処で第一に先立つものは資金であるということになって、最初に新聞社の後援を得ることが良いのではないか、出来れば其れを基礎にして一般募金を求めることにしようではないかということになった。新聞社の後援を求めるには7千米台の登山が題目では容易に乗り出しては呉れまい、矢張り学術調査兼登山でなければならぬ。学術調査であれば日本的な権威が参加しなければならぬ、其の該当者でヒマラヤに行ける人物が北大に居るか等と議論が分れる。だがそれはそれとして一応A新聞社に話を持ち込んで見るということになったのだが、一通りの具体的計画内容を作り上げ、又少なくとも隊長候補者は心積りせねばならぬ。

色々検討し、東大と学術調査の提携も考えたりしたが、結局は加納先輩の意見を主軸として隊長には中野君を推挙することになった。彼ならば南極越冬、ポツンヌーテン登頂の実績もあるし、新聞社も諒とするであろう。又遠征計画としては学術調査を主体にして良心的に構成するには適任者不足であるから、今度は未知の地域の登山を主体とすることにして、A新聞社札幌支局と交渉を進めたのだが、此の案は重役連中の御気に召さなかったとかで遂に未熟に終わった。

そうこうしている中にアビ山群登山計画は京都同志社大学に先鞭をつけられ、其れに代る目標を探している間に東京在住の先輩の一部から山の会の規約が明確でないのに遠征委員会を作ったり、遠征基金の募集を行ったりするのは行過ぎではないかとの注意があり、成程それも当然の理屈であるとし、それに従って会則改正に主力を注いだ為ヒマラヤ遠征計画は振り出しに戻ってしまった。

その間、会員の山崎君が日本ヒマラヤ雪男探検隊員として東部ネパール・ソロクンブ地方に遠征し、又橋本、東岡君がアラスカのメンデンホール氷河に氷結晶の研究調査に出掛けたりしたが、それらは山の会若しくは山岳部としては無縁なものであった。

其の後東京支部と緊密な連絡をとりながら数回の臨時総会が持たれ、漸くにして改正会則も承認され、昭和35年の12月1日の山の会臨時総会に於いて再びヒマラヤ遠征計画が議案として提出され、色々と検討を重ねたが、当時の原田山岳部長が非常に積極的に計画の推進を約束されたことは今度の遠征実現に大きな力があった。翌36年1月此の議案を臨時総会に於いて検討し、評議員の承認を得てヒマラヤ遠征隊派遣委員会及び委員が正式に発足するに到った。実に此の間アビ・ナンパ山群遠征計画から1年数カ月が過ぎ去って仕舞った訳だ。

次いで2月13日に開催した総会に於いて

1. ヒマラヤ遠征派遣を推進させることの確認。
1. 委員会の名称をヒマラヤ委員会とする。
1. 目標をカンジュロバ・ネパールとし、其の他2,3の目的候補地を至急選定すること。
1. 隊長候補者を至急決定すること。
1. 隊員構成は6乃至7人とする。

## 1. 資金調達の方法を具体化する。

等の概略が決められた。

其の後計画は着々と具体的事項の決定に移り、2月26日の第1回ヒマラヤ委員会では隊長候補者に中野征紀を第一に推薦することにし、尚2,3の候補を挙げる隊員候補者は20数名を挙ぶことになった。(これは最初のアピ・ナンパ遠征計画の時遠征の場合の諾否の可能性についてアンケートを取ってあったものを参考にした)又前回の総会の後、英人タイソン氏が本年のプレモンスーンにカンジュロバ方面に出掛けることに決定し、アプリケーションも取ったとの報告が東京支部からあったが、恐らく彼は調査が主体であろうし、今迄の経歴から見て登頂を最終目的とはするまい。従って我々の遠征目標は飽く迄カンジュロバとし、第二候補地にサイバル、次いでP29を挙げ、其の方の調査も並行して極力推進させること。事務局は北大理学部内に置くこと。委員の仕事分担即ち、委員長、副委員長、総務、会計、募金、渉外、企画、スポークスマン各委員を決定する等、漸く計画は軌道に乗って来たのであった。

次いで東京山の会支部との連絡報告、計画完成を5月末迄とし、可及的速やかに遠征の意志表示を対外的に行なう。企画委員会より行動予定の概略、費用概算案等の提出があって検討を重ねた。4月に入ってからは隊長詮衡委員会を設け、東京の委員よりは札幌に委任するとの通知もあって直ちに隊長中野、副隊長岡本丈夫隊員5名の案にしぼられて来る。又隊員候補者としては一応或る程度の遠征費用を個人負担出来るものとするのが決められた。其の時日本山岳会より若し遠征計画があるなら早く計画書を提出する様にと、甚だ好意的な書簡が届けられて感激する場面もあった。何しろ1万ドルも外貨を確保出来そうだというのだから、しかしこれは後から知った所では一種のデマであった様だ。

かくして4月15日に遠征隊長詮衡委員会より釧路の中野に電話連絡をとり、正式に隊長承諾の意を受けた。しかも本州製紙株式会社社長の了解も得られてあった。次いで副隊長に岡本を推すことは一応内意を伝えてあったので、これも国策パルプ会社側の許可を得ることし隊員5名中、2名は東京方面に居る人が望ましいし、現役部員からは少なくとも1名は確保したいと意見が纏った。又隊員は隊長、副隊長が相談の上夫々決定して貰うが、一応大略の隊員候補者名簿を提供して選抜して貰うことになった。

それでは遠征隊の名称を何とするか、矢張り北海道大学ヒマラヤ遠征隊とすべしとなって、北大当局の承認を得ることができ、隊長、副隊長の勤務先に夫々派遣方依頼の正式文書が発送された。又登山遠征趣意書の作成募金要領と其の進め方等実際活動の骨組が整ってくる。次いでこれについての後援会を組織し、道内の有力者に発起人となって頂く為の交渉を進める段階となった。

5月に入ってからは更に募金の具体的方法等が考慮され、遠征隊の事務局長には岡本が専任することに決まり、ヒマラヤ委員会としては募金に主力を注ぐことになった。一方アプリケーションの申請を早く進めようと話を進めた所が、日本山岳会の推薦状が必要だとのことで、急いで日本山岳会へ登山申請を行なったが、仲々推薦のことが選ばない。外貨の割り振りのことが重要であって、逆に北大は計画を取り止めるそうだと等と、東京在住の連中から誤解が流されたりもした。そこで伊藤秀五郎先輩から棋さんに宜しくと依頼状を書いて貰ったりしたが、折良く棋さんが渡道される要件があったので、来札の時極めて御多忙中の処を時間を割いて貰って札幌グランドホテルで委員一同御会して、種々御指導御鞭撻を頂いて感激した場面もあった。何と言っても棋さんは昔からの北大山岳部に対する良き理解者であったので、殊更に感慨にむせんだことでもあった。

其後募金の方法等で再び苦悶した時期もあったが暫々少し宛好転して行く。まあ何とかやれると目鼻がつか出したのは6月末であった。7月9日には隊員候補者に小林、永光、久木村、安間、鈴木が指名された。之の場合学生は飽く迄所属教室教授の承認の上学長の許可が無ければならない。東京支部に連絡に行った岡本の話では隊員にヒマラヤ遠征の経験者が居ない、キャラバンが長すぎる、37年の外貨の枠で2月に出発出来る心算かと注意が伝言される。それに続いて同月9日附カトマンズからの共同通信で英国隊の3人が全員カンジュロバヒマールの最高峰に全員登頂したとの報道が入る。

2 転, 3 転, 吾々は計画を練り直して次の目標を選ばねばならない。何処にするか。

「ペリー・ヒマール」

「ギャチュン・カン」

「チューレン・ヒマール」

では急いで文献調査, 踏査路の設定をしなければなるまい。目標は何れにもせよ此処迄進捗した遠征計画を中止することはない。前進, 前進あるのみ, 併し何としても時日が必要だ。一部の焦燥を他にして其の間8月26日迄計画の練り直しに追われて経過した。当日次の目標に前記予定地以外のチャムラン峰が選ばれることになった。其の選定の根拠が岡本から逐一報告され, 引続いて計画書案の検討が行なわれる。

1. 登路発見の可能性の有無, 之についてはノーマン・ハーディに至急詳細の照会をする。

1. キャラバンコースの選定。

1. 登頂予定時期とモンスーンとの関係, 従って出発の時期。

等が特に論議的になったが, それも全員の了解の下に今後のスケジュールの立案となり, 9月上旬の日本山岳会の海外登山審議委員会に隊長の出席要請, アプリケーションを求める書類の発送, 詳細な寄附金募集の打合せが行なわれる。其の中に以前から依頼していたシュルパの名前が大塚氏から報告されて来て曰く「ダワ・テンジン, プウ・ドルツェ, ラクパ・ツェリン」と。

愈々遠征実現が身近かなものとなって来た。会員一同気を揃えて後援に乗り出してくる時期が来た。資金の援助にも好意的な情報も少し宛入ってくる様になり, 食糧, 装備についても有利な条件での交渉が少し宛開かれた。隊員予定者にも次第に活潑に遠征事務に打ち込む様になった。

結局隊員は下記の如く決定された。

氏名	勤務先及び所属学部	調査項目	事務分担
隊長 中野 征 紀 (57歳) 医学博士	本州製紙株式会社		医 師
副隊長 岡本 丈 夫 (30歳)	国策木材株式会社	森 林 生 態	
隊 員 小 林 年 (29歳)	札幌市中央保険所	食 品 循 生	薬 品
” 永 光 俊 一 (29歳)	日本農産株式会社	家 畜	写 真
久木村 久 (26歳)	北大農学部農学科大学院 博士課程学生	食 用 作 物	渉 外
安 間 荘 (25歳)	深田地質研究所	地 質	装 備・梱 包
鈴 木 良 博 (24歳)	北大理学部動物学科学生	動 物	食 糧

しかし我々遠征隊の準備が本格的に行なわれ出したのは, 10月に入ってからであった。まず北海道の企業や先輩達からの資金募集に手がつけられ, ついで, 各装備の発注となった。札幌と東京に事務局がわかれているために, 相互の意志の伝達に常に困惑し, 準備段階の最大のネックは, 何んとか指揮系統を一本化し, 末端迄伝える, ということにあった。12月に入ると, 日本山岳会の海外登山審議会に, 計画説明のための出席を求められ, 山の会伊藤会長, 中野, 岡本とおもむいたが, 山岳会関係の割当外貨については, 折からの政府の外貨引締め政策と相まって, 並々ならぬ困難さを感じさせはしたが, すでに我々は1962年に遠征隊を出さねばならない状態に準備が進んでしまっていた。遅れ勝ちの東京の作業も3名の上京で, やや活発化した, 在京OBの大部分は, まだ出発出来るかどうか, 半信半疑のていであった。12月下旬, 初見, 岡本と日本山岳会の村木理事から, 37年度の体協割当外貨を年度の始まる前に使用することは現状では無理であり, ポストモンスーンに遠征を延期しては, と申し出があったが, 中野の意見でどうしてもプレモンスーンでなければということになり, 年が明けると早々に中野も上京し, 関係官庁を廻り出した。1月10日過ぎになると発注した装備, 食糧や寄贈を受けたものが, どんどん納入になり, 事務局になっている初見宅は, これらの荷物ではち切れんばかりになった。隊員達も

荷物の梱包のために次々上京し、人の動きは活況を呈するのにも、外貨の見通しはさっぱり、「外貨は何んとかする。俺が責任を持つから梱包にかかれ」との指示が出たのが1月21日、カルカッタに向う定期船は、1月下旬横浜出港のものを除いては3月中にカルカッタに到着するものがない。然しながら、税関、手続などの関係で横浜港から積出すのは、とうてい時間的に間に合わないことがわかり、予定していた船を神戸港でつかまえて、荷物を送ることにした。隊員達は、ほとんど徹夜の連続で荷造りを終らせ、33個の我々の荷物を積んだ三井船舶の奈良山丸は2月4日神戸港を出航した。

今年度の体協の外貨の割当を受けるということは、我々が考えていたほど生やさしいものではなかった。見通しがつかぬままに日はどんどん過ぎてしまう。2月22日になって今年度は日本山岳会としては、京都大学のサルトロカンリの遠征に重点を置き、外貨の大部分はそちらに廻すため、ほかの隊はよほどのことがない限り駄目だと伝えられ、思いあまって西堀栄三郎氏を仲にして、サルトロカンリの加藤泰安副隊長に、何んとか協力願えないかと頼みこんだりもした。

2月25日、どうしても學術探険隊でなければ出発出来そうもない、という結論が出て、札幌の原田山岳部長に電話で報告したところ、折良く杉野日学長が上京しているから、了解を得ると共に助力をお願いせよとのこと。在京の隊員一同牛込の旅館にお待ちしておりましたが、心よく許可下さったうえ、「チャレンジ、ファイト、アンビション」とはげましのお言葉までいただく。東京の陰うつな冬の空も、急に晴れ渡った様な気持だった。この日から、我々自身の気ままになる時間は、全くと云っていい位無くなった。どんどんスケジュールに追われ、日がたっていってしまった。全員が一度札幌の歓迎会にも帰らねばならない。北海道での勤め先の同僚達に、あまりにも瘦せた姿を見られ、これで山に登れるのかと心配されてしまう。注射だ、ビザだ、後送の航空貨物だ、と追われる間に最後の資金集めに勢を出し尽す。あとは野となれという訳でないが、色々協力してくれた装備食糧の発注先に、一時支払を待ってくれるよう、先輩達をわずらわして了解にかけ廻ったりもし、何んとか持出外貨の資金繰りのメドがたったのは、出発の前日であった。

## II. 往 路

東京——カルカッタ——キャラバン——ベースキャンプ迄

鈴木良博

昭和37年3月21日羽田空港から機上の人となった我々は、途中香港に一泊し翌22日夜半近く、10時過ぎにカルカッタのダムダム空港へ着いた。ダムダム空港で通関を終り、ホテルへ着いた時は夜中の12時をまわっていた。カルカッタの夜半の街並は、我々7名の隊員を迎えるには、あまりに盛り沢山すぎ、印象といっても特別にはない。しかし、自動車の窓から、「郷に入らば……」の例えを強調してくるあの何とも言えないインドの香りやカルカッタの香りにはへきえきした。ホテルへ全員が揃った時も、夫々の隊員は何かしらの感慨を抱いているのであろうが、すぐさま、口には出てこない。皆何かにつかれたようにわけの判らぬことをのしり合って、やたらに水を飲む。やつとインドである。そう感じながら、到着の晩はともかくベッドへもぐり込む。

翌日、取り敢えず、日本総領事へ隊長が挨拶に出かけた。ニューデリーの大使館へ依頼しておいた、ネパール大使のエンドースしたパッキングリストがまだ届いていない。さっそく、長距離電話を掛けることにした。大使館の話ではもうすでに頼んであるとのことであったが、まだ書類は受けとっていないという。さっそく、くれぐれもよろしくとお願いして、取り敢えずその書類が届くのを待つことにきめる。その間、全隊員で、植物園や動物園を見学して歩いた。待つ時間を、皆はむしろ喜んでいるふうであった。永光隊員は非常に友人を作るのが上手く、さっそく眼鏡店の中学生と友人になったり、市場に出かけて、ひやかしを楽しんだりしていた。ドレーを着た男や、サリーの女がいやおうなしにインドを我々に感じさせる。日大隊と同宿し、健闘を約束し合う。カルカッタ存在の邦人には大へんお世話になり感謝に堪えない。

カルカッタの暑さは、予想外にひどく、時に夜になっても気温が下がらぬので、それがこたえた。或る日、西ベンガルの地方紙「ステーツマン新聞」の記者が現れて、我々の遠征の目的やら、隊長の経歴やらを聞いていた。その時、話のついでに「此の度のネパール政府の新ルールをどう思うか」などと聞いてきた。実際その頃前記の新聞の切り抜を通関業者から見せて貰っていたので、我々の隊が此れまでになく、ネパール入国の際、関所料のような輸入税をとられるらしいことはかなり具体的な事実なのだと感じざるをえなくなっていた。その為会計係の仕事は大へんなもので、何も予測がつかぬ税金に対して、何らかの準備を整えるため、日夜の努力は大へんなものだった。で、くだんの記者にそんな事を聞かれたものだから、我々の悩みも大きかった事とぶつかり「大そう迷惑な事だ」という表現の新聞記事にされることを答えてしまった。それが後で、ニューデリーのネパール大使をえらく憤慨させ、僕等のパッキングリストに許可を与えるのが、又々遅れをきたした。全員カルカッタで遊んでいるわけにもゆかず、カトマンズへ行くべきものはゆき、他の隊員はピラトナガルへ行って通関の終了を待つことに決めた。29日の夜、シアドラー駅から小林、永光、安間の3隊員が発った。30日の朝の飛行便で、隊長と久木村隊員はカトマンズへ飛んだ。残された岡本副隊長と僕(鈴木)がカルカッタの通関を終了させ、荷物をピラトナガルまで運ぶ責任を負わされた。それより数日以前に、大阪府大の中尾隊長が訪ねてきて下さり、例の税金問題についてお互いに無駄な出費を防ぐよう努力することを申しあわせた。それから5日で、正確にいうと、エンドースド・パッキングリストを入手してから丸3日で通関を終った。荷物はサーダーがついて、5日夜トラックにてカルカッタを発った。トラックの前端には大きなベンワのマークがあり、少し安心して出発を見送ることが出来た。

6日のダコタ機でピラトナガルへ飛んだ。ピラトナガル空港へ出発の5名と連絡将校が向えに出ていた。何はともあれ再会を喜び合う。その晩は宿の食い馴れないインド風の料理にへきえき(と云っても新参者である我々2人と隊長のみで、あとの隊員は此れ見よがしに手づかみでバクついている)しながら、別れていた間の新しい経験について談笑した。ピラトナガルは完全にインド平原の内部にあり、気候風土ともまだインドである。特に目新しいものもない。カトマンズ経由で来た隊長らは、税金に関しては何も心配がいらぬという嬉しいニュースを持ってきていたが、実際にはそれが事務の仕事になれぬ我々の誤解によるもので、此処の税関では全く相手にもされずに正規の通り税金をとられるらしいこと、又さらに帰路に予定以上消耗しているであろう装備、食糧のためのデポジットを払わなければならぬことが明らかになってきた。しかも中央政府の指示と、エンドースド・パッキングリストがなければ、我々は何も仕事に手をつけられないという。荷物も来ない。荷物がつくのは予定では9日である。それまでに税金問題を片づけておくことは出来なかった。10日の日にやっと荷物をピラトナガルの税関の倉庫へおさめることが出来たが、いざ開始をすると、中央政府から何の書面上の指示のない仕事はすることが出来ぬと強調して一步もひかない。此れ此の通り中央政府の許可したパッキングリストがあるではないかと膝づめ談判をするが、一向に埒があかない。今さら役人根性をなじってみてもはじまらない。自分の国の苦勞を考えると、極く当り前のことなのだから。仕方がなく、再度カトマンズへ飛ぶことになった。前回行った久木村隊員が決まる。彼の話では、いっさいうまくゆくという中央の役人の話をすっかり信用してきたのに、又行くとは。と非常な不信を抱いているようだったが、とにかく此の事態を救うのは紙片なのだからと、連絡将校と一緒に飛んで貰った。頂度此の12,13日は週末とお祭りが重り合う連休で、うまくゆくかどうか定かではなかったが、一番近い12日の便で2人は発った。14日に2人は外務大臣の私信を持って帰ってきた。此れでやっとラチがあくはずである。さっそく此の日、通関を終了してしまいたかったが、税関長が不在の為明日にしてくれとの事だ。全くやりきれない。そうは言っても、役人さん達も僕等の仕事にかかりきりに出来るわけじゃないんだから、それは無理というものだろうと自らを慰める。荷物を全部受取ることが出来たのは、15日の正午だった。向うも「さんざん迷惑をかけた」というので遠慮もあったのか、デポジットは必要ない、税金は帰路で結構だと、此の面では我々の要求を全部取入れてくれた。15日の夕方遅く、我々は勇躍(?)フスレが丘にたどりついた。最初の計画では、今頃ベースキャンプを建設しているはずだったのに。此れからでは果たして間に合うかど

うか。しかし、やるところまでやってみなければならぬ。16日、1日かけて、船荷を解き、ポーターが担ぎやすいように、30キロに荷造りをした。此の丘はフスレ小学校の校庭の一部で、非常に見晴しの良いカッコウのキャンプ地だった。心配した人夫の屈辱も終り、日がとっぷりくれてから、シェルパ手作りの料理と $\alpha$ 米の味覚を楽しんだ。カトマンズで購入してきたネパール製の少しアーモンドのような香りのするブランドで壮途を祝した。

17日早朝、晴天の下、隊長を先頭にして、待望の、本当に待ち焦れていたキャラバンが始まった。いきなり大へんな登りになり、此れまで準備に東奔西走していた隊員は、歩き始めの急な登りはかなりつらいものだった。ハンディートキーは快調に通じる。その日の行程は、最初の日にしては可成りきつく、800 m 登り、1000 m 下った。下ったところにタムール河が曲流し、その河の流域が第一夜のキャンプ地であった。キャラバンは楽しい。キャラバンの1日1日はまたたく間に過ぎてゆく。もう少し時間があったら、もう少し巾広く歩けたらと望むことの連続であった。行きずりのグルカ兵と惜別し、お茶屋のおばさんの話をききつつ、立ち去りがたい感情をどうすることも出来ずに、今日の行程の長さをうらんだりした。そうであったからこそ、あらゆる人、あらゆる自然は、いずれも記憶に「素敵のまま」焼きつき、再度ネパールへ、又いずれか他の国へ往つてみたいという欲望は、涯もなく自分の胸中を去来しつづけてやまない。その想いは往きのキャラバン、帰りのキャラバンの中で自分の中に固定化してしまった。

それはとにかく、我々のキャラバンは、少しばかりの焦りと、それよりももっとゆっくりとキャラバンを楽しみたいという気持とに絶えず交互に感情を支配されながら進められた。翌日は1日登り続ける。1日一杯急な坂や、人家の中のダラダラした路を登りつづけると、登ること自体さして苦痛ではなくなってくる。ダンクータまで、途中にある全てのお茶屋ごとにチャンを飲み、紅茶を飲みつつ登り続ける。ダンクータは高い尾根上に長く延びる街であった。此の街は此の地方の中心で、ガバナーが居り、郵便局もある。此の路にそって両側に並ぶ家並みはどれをとっても全く同じ様な造作のものばかりで、土塀に囲まれた路の中をゆくようだ。路は石畳になっており、非常に歩きやすく、又美しい。狭さがこんなにムードを持って迫ってくることはない。子供達が行列を作る。僕は、かつて、進駐軍と称された外国人の兵隊さんが、すばらしい大きな体で、スピード豊かにジープを駆って、僕の村の役場前でストップしたときのことを思い出す。あの得体の知れない興奮と不安と羨望と期待とを、今此の子達も持っているに違いないのだろうと思うと、非常なにおしさが湧いてくる。穀物店をのぞき込み、米や粉の値段をききながら、母親の懐に抱きかかえられた子供に手をのばすと、その子は、突然、まるで悪鬼の再来に会ったように泣き出してしまった。驚いて、母親を見返すと、母親は、そんなことは何でもないといいふうに、ニコニコしている。それで僕も一安心した。ダンクータでは、街はずれの通称ポカリという水の溜れた池跡に泊った。ちょうど折良く、結婚式の行列が通りかかり、写真係の永光隊員はけっこうな被写体とばかり、16ミリのシネカメラ、35ミリ、プロニー版と、撮りにとりまわっていた。僕は食糧係の為、何はともあれ晩飯の指示をしなければならぬ。コックのアンノルは、何処からかブタと鶏をみつめてきた。さっそくチキンスープをつくる。彼は他の隊員の評判はあまり芳しくなかったか、僕の指示には良く従った。一番若いシェルパで20歳前後ではなかろうか。僕より若いシェルパは彼だけだったので、何かと話のうまも良く合った。途中デアレガオンで一泊して、一気にアルン河へ、一昨日登っただけの高度をまたたく間に下ってしまった。デアレガオンからアルン河への下り口にマグマンユーラという沢が左岸から合流している。その道一帯は、羊歯の丈を低くしたような草が生えていた。アルムのような風景を提供してくれる。牛が河原で草を食んでいる。いよいよ待望のアルン河である。此の河は遠くエヴェレストの北側、チベット領から延々ネパールを横断し、ガンジスへ注ぐのだ。水は、如何にも乾燥地帯を旅してきたといわぬばかりに、マイカの細片や、御影石の砂などを混ぜた薄嵐色をしていた。その夕、レガガート村の下、アルン河の流域にキャンプした時、全員アルン河で水浴した。アルン河の水からチベットの便りを聞こうと、口に含んでみたが、多少泥臭かっただけで、何も得られなかった。又泳ぐには少々冷たかった。

翌日も1日、左岸ぞいにアルン遊行し、ツムリントールという部落へ出るほんの少し手前のサワコーラの右

岸へ泊った。此処は、庭園をほうふつさせるような、美しい牧場であった。夜、美しい星空、恐らくは、ネパールで見たうちで一番、星のまたたきが激しく、またたいている場所はすぐ近くかも知れないと錯覚するような星空だった。夕飯後、大きな岩塊の上に寝ころび、隊員達は思い思いの想念にふけっているようだった。或る隊員は岩上で高唱し、或る隊員は、シェルパをとっつかまえて面白い話しを聞かせていた。

翌日、晴天の中を、キャンプ地より小高くなっている台地にあるワムリントールの部落へつくと、真正面にチャムランが、かなりの仰角の位置に君臨していた。ボダイ樹の大木が生えている。まだ耕したばかりの赤土の畑が路の両側に広がり、山は少し霞がかかって青白く澄んでいた。ばかに大きく、マセムを右手に控えさせたその山は、まるで一枚の淡色の屏風である。平な山稜の左手に急な尾根がある。その尾根はまだ陽光の恵みを授かっていないので、青黒くみえた。我々は、ボダイ樹の下で、葉間のスリットからこぼれる光線に顔をまだらにさせながら、その尾根が西尾根らしいと話合った。そこへ、プルキバが息せき切って下ってくる。何かと問うと、一昨日彼は岡本、安間隊員の先発隊員用シェルパとして1日先を歩いていたのだが、今日アルン河を渡った地点で安間隊員が腹痛と下痢が激しくなって動けなくなってしまったとの報告を持ってきたのだった。それはいけない。岡本隊員は安間隊員を木蔭の涼しい所に残し、先を急ぐので他のポーターを連れて、そのまま先に進んでいるということを手紙で知る。「早く別の隊員を派遣して下さい。それから調味料を少し分けて下さい」と手紙に書いてあった。隊長は、永光隊員を指命した。彼は写真の道具を手放し、先発隊の後を追いかけた。路がアルン河マイカと白砂とがまじって、キラキラした照りかえしが眼にいたいほどの河原を過ぎると間もなく渡河地点へ着いた。フェリーでの渡河にたっぷり半日とられ、渡河地点の対岸の田んぼの中に泊らなければならなかった。其処で安間隊員に会うと、彼は思ったよりも元気で、我々を安心させてくれた。とにかく下痢がひどらしく、その晩は、手打うどんを作ったがほとんど食わず、みかんの缶詰を特配してやった。皆なに、1日1人1万円かかっているんだからなどと冗談を云われて、彼はしきりに恐縮していた。此処からアルン河に別れを告げ、いよいよサルバ峠へ向う。その前に小さな尾根を巻き込むようにして、尾根の北側の支流へ入った。此の地域では、今までアルン河の左岸地帯で目にしていたネパール人そのものの顔、衣服とは少し違っていた。その傾向はサルバに近づくに従って強くなる。サルバ峠の中腹、2,900 m 辺りのカルカ放牧場の近くにキャンプした。サルバ峠に立つと、真正面に雪をいただく山が見え始めた。峠の景色はやっ和高山味を帯び、少しの風で肌寒いほどだった。此処からいよいよシェルパ族の地帯に入るわけだが、峠の下りで最初に現われる部落サナムや次のシャレガオンの住人は全くチベットの容貌を持った人間であった。家並みも、器物で目にした、ナムチエバザールの作りに近く、マンストーンもそれを実証していた。グーデルの部落は非常に大きく、ホンゴコーラをはさむ対岸にも部落が発達していた。此処の住民にたどたどしいネパール語で、何族だと尋ねると、我々は“ライ”であると答えてくれた。これを聞き出すために払った努力は並み大抵のものではなかった。何故なら、こちらが不正確なネパール語しか話せないのに加え(翌日解ったのだが)此のライ族自体大部分の者は正確にはネパール語を知らないためであった。

グーデルでは、米も粉も入手出来ないという話であった。翌日晴天の中をグーデルの村を出発し、まもなく少し小高い所に出ると、バムリントールとは又違ったチャムランが我々の前方に屹として立っているのがみえた。それはそびえているという言葉が非常にふさわしく、これほど上手にそびえているという言葉で形容したことは今までなかったであろうと思われる程である。小麦畑の中の小路を歩きながら、グーデルで全部新しくなったポーターの1人1人を見較べ、時々それらのポーターの黒髪と背にある大きな荷物の行列の向うに、チャムランを望見するのは此の上なく楽しい。山は、何時も、そうであるように何の挨拶も我々にはくれようとしてないで孤立している。その山の前では我々のキャラバンはまるでわざと人前で大げさな身作りをする淋しがりやの子供の行動そのものだった。此処から雇ったポーター達は、皆屈強そうな男が多く、中にはデイデリとネパール語で呼ばれる女のポーターも数人いたが、彼女らも如何にも一家の要のような頼りがいのある女達だった。グーデルを発った日午後2時頃から雨になったため、シェルパもポーターも歩きたがらなかった。隊長はすたこら、もう、ず

うっと先を歩いているので、此んな所で泊るのはためらわれたが、他の隊員も歩くのは無理だということで、チェスカムという部落の北端チェミシンの丘の上にキャンプした。今日は本当はマンゲンコーラまで往きたいと思っていたのだが、あれほどポーターがさわぐのでは致し方なかった。

4月28日、今日こそはマンゲンコーラへと勇んで歩き出したのもつかの間、10時頃に出会った小さな沢の渡渉点で、その先の道の悪さにへきえきしたのか、ポーター達はもう先に行きたくないとさわぎ出す。いくらたっても動きそうもないので、ついにカンシャクを起し、何人かずつ集ってワイワイガヤガヤやっているポーター達のグループを一つ一つどなりちらして歩いた。やっと腰をあげたので、ポーターの終尾について歩き始めたが、対岸から路は急に悪くなり、本当に踏跡でしかなかった。又ショボショボ雨が落ちてきた。コウモリ傘をさして登るが、ブッシュがひどい為難儀する。いわば、胸突八丁というような登りがしばらく続いた。ポーター達の一団は、その登りがやっと平坦になる辺りにある岩小屋の下へ入ってしまっただけで動こうとしない。彼等をながめているうちに、だんだん物悲しくなってきた、何も云う気になれず、黙って歩き始めてしまった。その日もついにマンゲンコーラへたどりつくことは出来ずに、雨の降り続く薄暮の中で、少しばかりの草地をピッケルとスコップで平坦にし、テントを張ったポーター達もさすがに寒々としてみえたので、彼等にルーフテントやキャラバンテントを貸し、我々用は高所用装備から大きなカマボコ天幕を出し、それを張った。

翌29日、早朝、寒くて寝られぬポーター達の歌声で眠りをさました。ポーター達は昨日の行動に対し、5ルビーの賞与を寄こせということナイケ風の2人の男を代表者に立てて要求してきた。しかも、彼等の言葉に依れば、どうも今日はすぐ下にあるマンゲンコーラまでしかゆかぬつもりらしい。こういう事態に不馴れた我々は困惑するばかりであった。しかし、サーダーの言うところでは、サーブが居ると、ポーター達は安心しきって歩き出そうとしないから、どんどん先に歩いてくれという。その言葉を信じて、出発準備をしていると、傍らで交渉していた会計の小林隊員、サーダーとナイケの間に話しがまとまったらしく、人夫もワァーと云って夫々の荷物の所へ散ってゆく。さてはやられたかと思ひ、小林隊員にたずねると、2ルビーは払わなければならないだろうという。仕方がないだろうと思う。とにかく歩こう。そろそろ歩き始めた人夫の後を追う。途中から雪が現われ出したがすぐ消える。2時間余りでマンゲンコーラへ降りてきた。此处へちょうど連絡の為下りてきた岡本隊員と道案内人のハンターに出会った。彼等の話の節々からでは、此の先は楽観は許されないようであった。岡本隊員はしきりに「絶対に行けますよ」という。しかし、そういうことから何か先が非常に悪いのじゃないかと思われて仕方がなかった。雨が降り続く。プレモンズンにこんなに雨が多いとは予想もしていなかった。

翌29日朝から霧雨の降る最悪の天候だったが、昨日の一件のせいか、ポーター達は今日は何も云わずに出発の準備にかかった。路はいきなり登りにかかり、それから尾根を2本ほど巻かなければならない。急に200m程落下する滝のふちを巻き、又尾根の巻き路にさしかかる、注意をして探さなければ見失うほど路はほんの申しわけ程度だ。しかし、土地のハンターが先導しているので、まるで機械のように正確な所をたどっている。昼近く雨は一しきり激しくなってきた。今日はポーターは何も云わない。好都合だ。どうしてもソルブコーラまでつきたい。しかし、ソルブコーラへの下りにさしかかると、ブッシュの下はぎっくり残雪がつまっており、もうどうにも、進めなくなってくる。仕方がなく、強いポーターのみ連れて、小林隊員とサーダー、弱い女のポーター、子供のポーターは下り口の岩小屋へ残し下ることにする。最後の沢へ下りるところは、雪は硬くはないが、非常な急斜面になっているため、フィックスロープを張る。ソルブコーラは沢いっぱいには雪がつまり、劔沢のようである。そこの岩小屋は非常に広くて良いキャンプ場を提供していたが、それはシェルパとポーターにやることにして我々用のテントは雪の上に張った。翌日下ってきた小林隊員の話では、弱いポーターは帰したとのことだった。もうこれから先、彼女達や少年達を連れてゆくのは可哀そうなほどだったから、それで良かったと思う。ソルブコーラからの1日は此のキャラバン中最悪の路だった。35度近い雪のびっしり積った沢形をぬけ雪崩をさけながら4,000mの尾根上へ出るのが、その斜面いっぱい軟雪があり、ポーターの裸足がいたいしたかった。尾根上の岩の出っばりの下を地ならしをして、其処にホング・ルブンという名をつけた。ホング・ルブンからはずう

と雪の中の歩行が続いた。スタンスを切り、フィックスを要するような急な氷壁の登りもあり、此の頃にはポーターの数が20数名に減っていた。途中ワテルマコーラの岩小屋で泊り、先頭の我々は、後尾を小林会計係とリーダーに任せ、一路ベースキャンプへ向うことに決めた。先発隊はソロクンブから岡本、久木村隊員と、シェルパのアンゲルブ、それに道案内のハンターの4人である。彼等はもうベースキャンプ地を定められたのだろうか。隊は完全に三つに分れて進んだ。後尾からのポーターの荷上げと先頭からのローカルポーターとシェルパに依る逆ポッカにより、尺取虫のような前進が続く。5月5日の夕方、ホンゴコーラの河ぶちで土の上に立った時は実に嬉しかった。此の辺りには大きな針葉樹と石楠花の巨木が棲え茂っており、久方振りに大きなタキ火を楽しんだ。此の日、久木村隊員とアンゲルブと道案内が下ってくるのと会い、どうしたのかと思ったら、岡本副隊長の工合が芳しくないという。症状を聞いて、隊長は何か想像がつからしく、アンゲルブを薬とりに下ろしてやった。道案内は支払いを小林隊員から受けとれるよう手紙を渡され解雇された。彼は一生懸命我々サーブを拜んでからアンゲルブの後からついてガスの雪田の中へ消えていった。岡本隊員は一人で上のベースキャンプ予定地で寝ている。翌6日、隊長、久木村隊員はベースキャンプへ上っていった。7日に安間隊員がベースキャンプへ上り、小林隊員が下から上ってきた。

5月9日、昨夜11時半頃、ベースキャンプ予定地で隊長やその他の隊員に会ってきて、小林隊員と話し合った。そして、今日、一気に上へ登り、ベースキャンプをさらに上へ延ばすことに定めたのだ。そんなふうなことを、何か切羽詰ったような気持で朝の2時過ぎまで語り合った。前記のベースキャンプは、通称病院と云われていた。シェルパとポーターの一部に荷を担がせ出発する。これから病院までは、劔沢の下部のようななだらかなU字溪谷である。沢の中はまだスキーが出来るほど雪がつかまっている。しばらく登ると、辺りからすっかり巨木がなくなり、灌木地帯になってしまった。ツガに似た木が背丈もすっかり小さくなってしまい、ちょうど日本の山の遺松のようになっている。それに混じってツツジのようなのも現われてくる。ポーター連中は何か声高に談笑しながら歩く。彼等も此んな所を歩くのは楽しいらしい。しかし、風景はいよいよ荒々しく、生物はますます小型になってゆく。虫にもかまってはられない。

マロリーは「Because it is there」と山に登るわけを問われた時答えた。しかし、僕にはそんなものでは済まされそうにない何かがあるような気がして致し方がない。人と山とが相対している場では、もっとしれつな火花が飛びちるような激しさがある。

間もなく嶺を一つ越すと“病院”へ到く。其処ではすでに安間隊員と久木村隊員が出発の支度を整えていた。ベース・キャンプはやはり延ばされるのだ。此処は実に住み心地が良い。ホンゴコーラの本流とは違い、澄んだ水の流れる小川もあるし、背後には、6,000 m 余りの無名の姿の良い山が立っている。チャムランから真南に延びる尾根はその山の北側でぐっと高度を下げ、ちょいと反対側をのぞけそうなかっこうの峠をつくっている。此処で昼食をとる。軍隊用として昔使われたカンパンをバリバリかじる。下手に味のついたものより、こういう方が喉を通りやすい。背後の山について、ノーマン・ハーディーがこう書いている。「アペリチフにこいつをやっつけてから、チャムランに向うというのはやってみたい計画だ」と。その山は端整な容姿を、例外なく午後になるとわき出す雲の為、残り少なくなった東の空の淡青の中に滲んでいる。広々とした、みるからにふさわしいベースキャンプサイトを見捨てるのは惜しい。澄んだ水も流れている。小さいながらツガのような焚木もある。此処に隊員とシェルパ用のテント及びキッチン、倉庫用のテント等を張ったら、何と素敵なベースキャンプになることだろうか。しかし、我々は今後も、カオスの産んだ「夜」の中に居るわけではない。何でそんなに欲ばることがあろう。こんなにも素晴らしい、そして、此んなに胸を躍らされる未知の世界が我々を待っていてくれるのだから。それに、そういう世界へ入ってゆくには、いずれ一つは見捨てなければならぬものが常につきまとう。此の地を選べるわけではない。

ノーマン・ハーディーが越してきた沢の合流を過ぎると間もなく、広々したいくつめかの段に出た。そこをキャンプサイトに定めた。テントを張り終る頃、ばらついていた雪も止み、例外のない午後の雪がすっかり何処

かへ行ってしまっていた。その空の中に、まるで、どっしりとした肉厚の屏風のように北西間近に追っていく山がある。雪も氷も寄せつけず、すでに西の彼方に去ってしまい、もう遠い所にしかその恵みをくれようとしないう太陽の弱々しい残照の輪廓のみをきわ立たせ、黒々と中央につっ立っている山がある。紛れもなくピーク 41 だ。視線は背後へと廻る。ああ、チャムランだ。薄紅色の肌は魅惑的な姿に見える。僕の心はおだやかではない。何か一つの道程のようでもある。下から上へずうと連るその山肌は、幾層にもなって、奥深く彼女の心を包んでいるようでもあり、又、かえって逆に露わなまでの姿をつくり、僕を理解のしがたい魅了に引きずり込んでゆくようでもある。一番手前に見える岩尾根にはもう陽が当らず、其処だけは一そう黒く澁みをつくっている。その尾根の上部は、一つのくびれをつくっていて、一気に僕の視線を内懐へと招く。僕の心の興奮した血流の中で驚顎が跳る。

神々のうちで最も美しいもの、そして人の肢体をなよなよとさせてしまうもの、あらゆる神と人のところを屈服させ、分別を奪い取ってしまう、あの「エロス」か？

或る種の屈辱感とその次に心の座を奪う。それから、何がそうさせるのかは知らないが、忽然と身振りが体中を走って、得体の知れない闘争心が湧き上がる。北の方へ向って、大地の波動は無限に続くはずだ。しかし、僕の視線は真黒い岩壁に間もなくさえぎられる。其処にどっかと鎮座しているのがローツエの南壁だ。屈辱感と闘争心が不規則な鼓動のように去来する。それから哀願したくなるような気持に襲われる。

何時の間にか、僕達はホンゴコーラを渡って、右岸の古いモレーンの丘の中腹へ来ていた。視線は又何かに操られるようにチャムランへ針付にされる。くびれている尾根がハーディーの言う西尾根のようだ。登れるだろうか？判らない。他にルートは？此処からでははっきりしない。頂上とおぼしき辺から落ちる西に面する斜面は非常に広い氷壁となっている。台形の急斜面だ。その下は小さな氷河になっていて、斜面の北の端から延びる尾根がくびれの辺りで分れて、枝尾根がぐるっとその氷河を取囲んでいる。その氷河の奥は見えない。くびれの辺が小さなジャンダルムになっていて、その下、手前側はスッパリと切れ落ちる岩壁だ。西尾根の岩の黒さと西面の頂上直下の斜面の薄紅色。遠く、見るからにスマートな線をひくピラミッドピークの柔々した肌とその色。さらに遠くに、ローツエの南壁。其れらの基部を一面の折りなす起伏がしっかりと受けとめている。累々と続くモレーンの灰色がかった冷たさ。それらの両側で白く雪をいただき始める斜面との間に横たわる燻んだ、まだゆっくりとした冬の休息からさめきらない灌木や高山植物や露出した地肌の帯。それらのはては日暮れの残照の中へはにかみの抜けきりぬ少女のようにかくれようとする。

5月10日。晴天の中を第一キャンプを西尾根の取付点へ設けるべく、小林、久木村隊員と出発した。10時頃、西尾根の基部近い、一昨日の隊長と久木村、安間の両隊員のポッカ地点についたが、西尾根の基部は、此処からみえる範囲では非常に悪そうだ。全面が真黒で雪を寄せつけないのか、既に溶けてしまったのか、それは判らないが、とにかく岩だ。取付いてみたところで此処からじゃ、あの岩を乗越すのが精一杯で、それに、昨日ベースキャンプからみたように、その上にもう一つ氷の壁があるとすれば、此のルートはもはや諦めた方が賢明のようだ。此の3人はまるで、不確実な未来に当面している少年のように無思慮、無分別なことを口にしよう。しかし必ず誰れかのきっかけで最後は山の話に戻る。3人は暗黙のうちに、此のルートに思い切りをつけることを了解し合っているようだ。2時間近い休息ののち歩き始める。テポ地点から2時間余りの、ホンゴコーラの河ぶちにテントを張った。2人は設営が終るとすぐテポをとり下っていった。僕は飯の仕度にまわる。翌朝は大そう冷え込むと思ったら、全くの快々暗だった。気味が悪くなるほどだ。此処から南西にみえるピーク 41 の北壁は冷やかな沈黙の中に眠っている。忍者の眠りのような冷たさがある。

ホンゴコーラの左岸のモレーン台地へ向け登り始める。余り天気が良いので途中の氷河湖のほとりで休んでいる間に何時の間にかガスが湧き出し、あわてて眺望のきく地点まで登ったが、其処へ着いた時にはもう雪さえ降ってきた。今日はぜひ見ておきたいし、それに此の雲だって夕方近くになれば晴れるだろうということは今までの経験から予測がついたので、小さな岩陰へもぐり込んで晴れるのを待つことにした。ところが一向に良くな

る気配もなく、かえって一層大きい結晶の湿った雪が降りだした。どうにも体が冷えてきて仕方がないので、今日は取敢えず退却することにきめた。帰路モレーンの丘陵地帯で路を間違いくぐるワンデルングしてから、やっとテントに帰りつくことが出来た。テントへ帰りつくと、永光隊員が、上ってきていた。彼は、ホンゴコーラ・ルブンからグーデルへ米の買出しに下りていたのだが、昨日帰ってきたのだ。「鶏を4羽買ってきたぞ、いまベースキャンプで、米のみや残飯を食って生きてるぜ」

その日夕方に永光隊員は明日再び上ってくることを約束して下っていた。翌日疲労のため休養をとる。小林隊員が一般的状況報告のためベースキャンプへ下った。代りに永光隊員が第一次の偵察隊に加わった。翌13日第2回目の北西面、北面偵察に出かけた。此の日は終日好天で、我々は思い残すことがない程北面、北西面を視察出来た。第一核心部の北西面には小さな急峻な岩尾根が派生してきている。とりつくとしたら此の尾根だが、一段のギャップを持つ此の尾根も、雪も氷も寄せつけない、鋸歯状のやせたりッジの登行になる。第二の核心部チャムラン山稜から枝分れして、北のバルンツェ方向へ向う主稜線の辺は見えない。もう少し高く登らなければ駄目だ。我々はモレーンの小高い丘、約5,700~5,800 mまで登り、かっこうの展望台にたどりついた。しかし、振り返ったとたん、絶望の淵へ叩き込まれた。可能性は、無惨にも、そこにへばりついている懸垂氷河の段々の今にもぐずれ落ちそうな重苦しさに押しつぶされてしまった。3人の目は再び西尾根へ向けられる。しかし、どうだというのだろう、その尾根の北側面も頑固に接近を拒んでいる。

沈黙に支配された無惨な退行が始まった。これは只事じゃないぞ、という気持が無気力な脳裡に浮んでは消えてゆすが、その後の解決や対策がさっぱり浮んで来ない。

夕方4時過ぎにテントへ帰りつくと、誰れかテントの中にいる気配がする。声をかけると隊長が吹き流しから顔をのぞかせた。我々の気持の大体の察しはつくらしく、深くは尋ねてこない。それで少しは気持を落ちつかせる間が出来た。隊長の方から口を開いた。

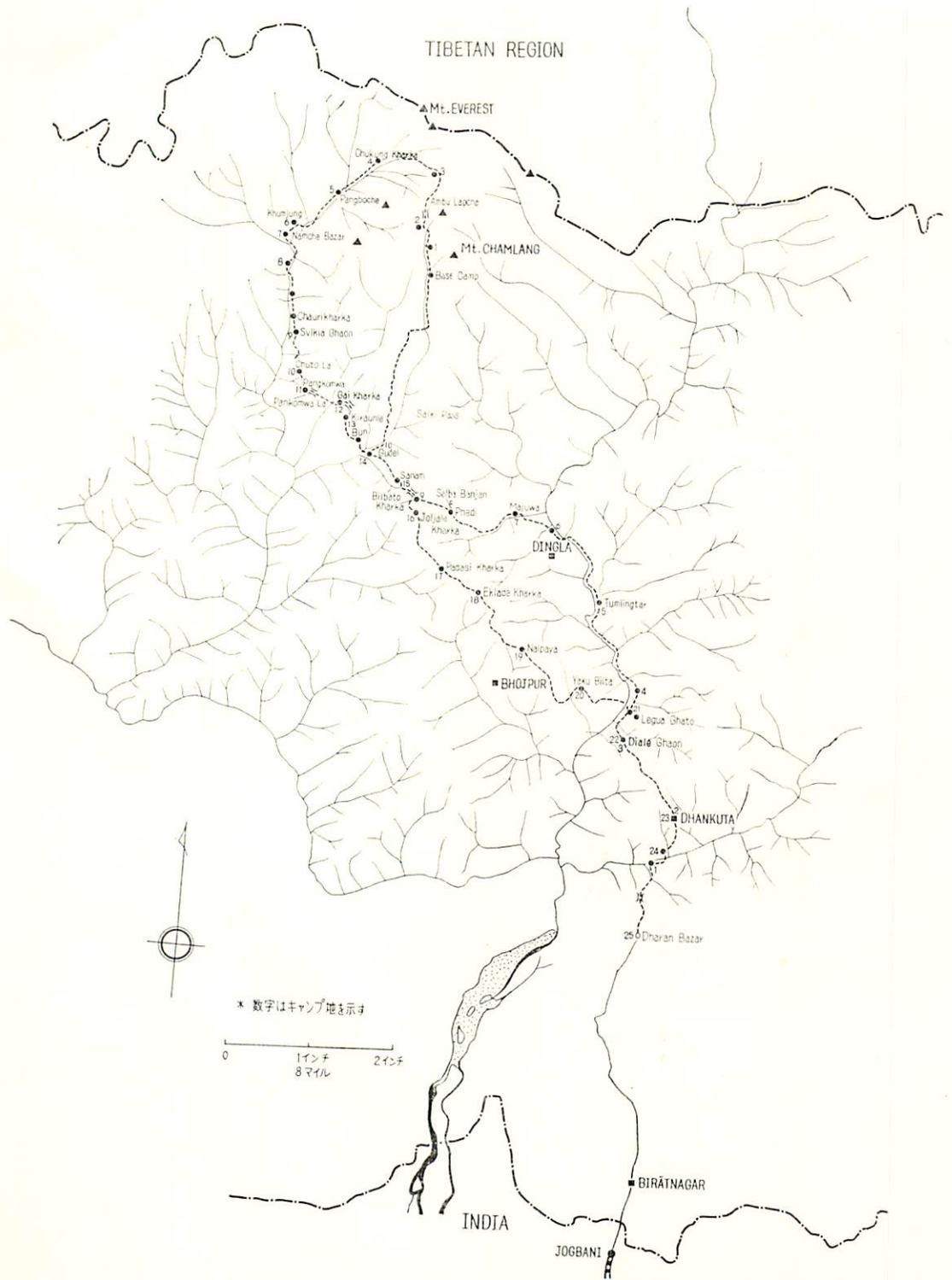
「良いルートがあるのだ。鈴木、お前なんかもう嬉しくて嬉しく仕方がなくなるような手頃な氷河もあるんだぞ」何が何だか判らないが、隊長は別のルートを探してきたらしい。それから、何度か問答を繰返して、やっと理解出来たのは、どうも南尾根の側面に上り込む氷河にルートがあるということだった。深くは判らない。しかし北側一帯がこうでは180度方針を転換する必要があるのだから、ともかくもそちらへ向ってみよう決める。その日、久木村隊員が此の決定を持ってベースキャンプに下り、翌14日、永光隊員とシエルバ、ローカルポーターを指揮して、第一キャンプの移動を完了した。新の第一キャンプサイトは、旧のキャンプサイトに比べ、非常に動きのある風景を提供している。荒々しい。日中になると始まるらしい、岩壁を落下するインスタントの滝の水音やセラックの崩壊する音。時々1,000 mも上から落ちてきて、粉碎する岩崩れの音。氷河の中は音がたえなかった。

### III. ベースキャンプより第4キャンプ迄

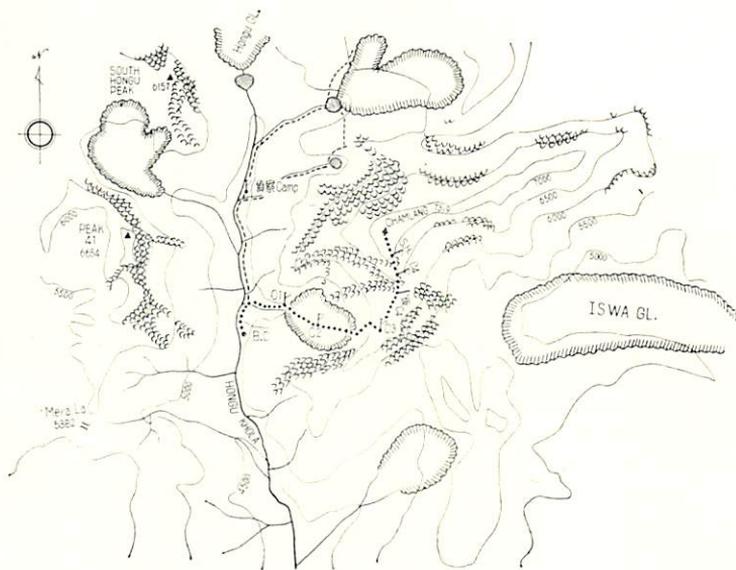
小林 年

チャムランの西面、北西面、更に北西面への登路は偵察の結果、とうてい歯の立たないものとなってしまった。隊長が見つけた、頂上から南に出ている屋根から真西に落ちている氷河を試みる事に決定した。偵察に向った時は、ほとんど気にも止めていないルートであった。日本を出発する前に、ニュージー・ランドのノーマン・ハーディから来た手紙によると「西面又は北面にルートとして可能性がある」とあったのが頭にあったから南面をよく見ずに北面に廻ってしまったのだった。

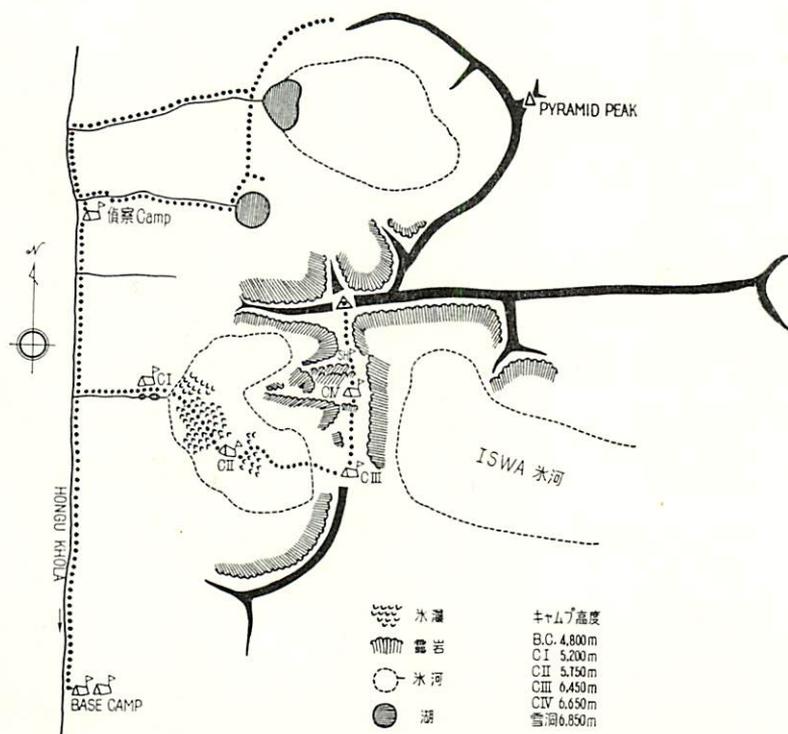
5月14日、前日北面のルートが見込みがなく南面に向う、との連絡を持って降りてきていた久木村、岡本サードと4人でベース・キャンプを出発した。ベース・キャンプの上流に広い河原があるが、先日降った雪が日陰にまだ消え残っていた。天候は晴、まだ偏西風が吹いているらしく、薄雲が西から東と流れていた。ホングー・



H 図 1



H 图 2



H 图 3

コラの氷河の落ちている沢の出合いに出た時、氷河の上部が、はっきりと見られた。ジャンダルムから、頂上に続く南西面の急傾斜の岩肌に、点々と氷が見られ、絶望的なその全貌が我々をばばむ様にそそり立っていた。南尾根は所々岩が露出している所が見られたが、コルからの傾斜はそれほどひどいものではなさそうに見られた。コルより沢の上部に落ちている氷河は、想像したよりもひどくはなさそうであったが、コルに出る最後の登りは太陽の光りを反射して、見るからに固そうな氷の様であった。何とか氷河を乗り越さなければ、氷を乗り越せたら、後は傾斜もそれ程でない尾根だから何とかなるだろう。

出合いの岩に腰を下し、氷河のひだをスケッチした。あの割れ目はこっちを巻いて、あの割れ目はあっちを巻きと、鉛筆を走らせ乍ら氷河の割れ目、ステップを追って行く。もう登り始めている様な気になったりもする。沢は伏流になっていた。出合いの附近はゴロゴロした岩の所を、あっちによけ、こっちにさけ登って行くと、お花畑の様な所に出る。撤収の頃は、きれいな花が咲き乱れていたが、この頃はまだ花のない、まるで亜寒帯地方のステップ地帯といった感じであった。軽装であるが相変らず呼吸は苦しい。ジャンダルムのすそと、氷河の押し出されたモレーンとの間を登り詰め、ジャンダルムの真南のあたりから、モレーンの山の上から、ガラ場を下り、モレーンの丘が点々としている所に入りこんだ。

氷河の末端は、右手は急な氷と岩の壁の所で、モレーンの下にもぐっていた。左手の方は沢山のひだや割れ目におおわれ、ジャンダルムと南西面の岩壁の間から落ちてくる、岩の通路の所で終っていた。第一キャンプは出来るだけ氷河の近く、そして落石の危険のない所と、あちこち探しまわり、大きな岩の陰に決め、そこで4人で昼食を取り、これからの行動について色々相談をした。第一キャンプの標高約5,200m位であった。

食事をしている最中も「ガラガラガラ」とあちこちで落石があり、両側の岩壁にひびいてものすごい音を立てていた。

昼食後、早速、久木村、サーダーと3人で氷河の偵察に出かけた。氷河は直ぐそこというのに、モレーンの丘を乗り越えたり、巻いたり結氷の所迄来る内に汗を流していた。生れて初めての氷、何となく親しみにくい物であった。氷河といっても、末端では岩と泥とに汚れてきたらしいものである。氷の上を解けた水が流れそして割れ目に吸い込まれて行く、そして又表面にと出てくる。水の流れている所は、ブルー・アイスそのものだ。末端でもあちこちに割れ目が走っている。最初の内はまったく、おっかなびっくりといった調子で歩いていたが、その内だんだんと大胆になってくると、時々足元がクシャリと音をたてて崩れ、はっとする事が度々であった。サーダーが先頭を切って歩いていたが、さすが慣れたものといった感じがする。だんだん慣れてくると、クレバスのあり相な所や、クレバスの走っている方向が判る様になってきた。セラックの間を抜け、汚れた氷河の部分を通り過ぎると、氷の塊りが点在している所に出た。サーダーの言によると「この辺は時々落ちそうだ」と言う。なる程行動中、後半には新しい氷のブロックが転がっていた。

所々柔かい雪の所等を通り抜け、大きなクレバスの所へ出たが、その上部は見るからに落ちそうな大きなブロックが沢山ある。サーダーが「ここは走って渡らないと危険だ」と言う。さて走る段になると、とても走れたものではない。「ハー・ハー」と肩で息をしながら、時々上眼使いにブロックを盗み見、そして2歩、3歩と立ち止り乍ら、歩を進めて行く。ようやく岩壁の直下の第1段のステップに出る。その日の仕事は足ならしを兼ねていたので、そこで迄終る事にして腰を降す。上の方を見上げると、氷河は幾つものステップを見せ、空に続いている様に感じられた。ここで久木村が愛用のコニカを取り出し、ファインダーをのぞきながら、2、3歩後退した時「アッ！」という声を出したので、その方を見ると、片方の足をクレバスに落して、あわてているのが目に入った。「アハハハハ」とこちらでは笑い出してしまった。本人は真剣な顔でいるのが又面白かった。

帰りには、ルートを少しでも歩き易い所と思って、2、3カ所道をつけなおした。今にも落ちそうなセラックをエイとばかりピッケルで落したりしてきたが、途中でセラックの間に迷い込んでしまい、水の流れている所や土砂くずれの所を滑り降りて、第一キャンプへ戻ってきた。

初めての氷河上の登行と、しばらく振りてつけたアイゼン、こんな事で、本当に気持ち良い疲労を全身に感じ

た。キャラバン中の苦勞も色々あったが、やっぱり山へ登る事、氷河上のルート工作、キャンプの建設、これらが長い間待っていた苦勞なのだとつくづく感じられ、新しいキャンプでの落石の音を耳にしながら眠りについた。

翌15日、久木村と2人でルートの工作に出かけた。第1ステップ迄は比較的気を使わずに済んだ。呼吸の方も前日よりはいくらか楽といった調子だった。第1ステップから上は雪の所を1歩1歩ラッセルをしていかなければならなかった。沢の出会いから眺めた時は、あの割れ目はこっち、あのステップはあの辺からと、かなり詳しく眺めたつもりでいたが、実際に氷河の中に入っていると、さてここはスケッチではどの辺か、となってくる。余り大き過ぎるので迷ってしまい相な感じと、一生懸命アルバイトしているのに、さっぱり進度が目に見えないので、いささか途方に暮れてしまったりした。雪の表面は傾斜のある所では、いくらかクラストしていた所があり、1歩1歩踏みしめ踏みしめ、1歩1歩呼吸をしなければならぬ。低地の人間が見たら、何とどのろのろしているのだろうと感じられる位に、すべての動作がかんまんじしか出来ないのだ。低地での動作の中には、ずい分息を止めて行なう事が多いが、そんな動作が実に息が切れてやりきれない。例えば煙草に火を付ける、ステップを足でけて作る、こんな動作が息切れを招くのだ。2、3歩動いては休み、そして2、3歩と果しなく続く。トップが或る程度進み、後かっこれを追いかける段になると、日本の山ではどんとどんと追いつくのだが、ここでは又その人間も2、3歩いては1休みといった具合で、追い付いた時にはいい加減のびしまっているといった調子だ。

縦に走っているクレヴァスは、比較的早くに避ける事が出来たが、我々の登った氷河は可成りの傾斜があり横に走っているクレヴァスは、直ぐ傍に行かなければ判らないという場合がたびたびあった。ようやくラッセルをつけたら、クレヴァスがパクッと開いていた時にはがっくりと来る。なるべく降りない様にと、うろうろするが、時にはずい分下迄降ろされたりもした。

第2キャンプは最初、大きなブロックの上に作ったが、コル迄の距離が遠過ぎる為に、岡本、鈴木達の手で標高5,750mのステップの所に移された。第1キャンプ建設14日、旧第2キャンプ建設15日と順調にキャンプは進んでいった。モンスーンの到来が何時になるか、隊員の高度馴化の問題はキャンプ間の荷上げの問題は、と議論の種はつきない。どんなに議論をしても、登らなければならぬ。ルート工作活動、高度馴化も止むをえないのだろう。氷河の上に赤旗が立てられ、踏跡がだんだんと延びて行く、そして危険な場所には、ザイルが固定されて行く。こうして徐々に高度が高まっていった。新しい高度に達する度に、軽い頭痛と息切れがする。そして2度目には前よりも軽い。2晩、3晩と過ぎる内に体が慣れてくる。体が慣れても体の疲労はだんだんと蓄積されて行くようであった。

交代で下のキャンプへ降りて行く時は、何とはなしにはっとした気持になる。「ああ、俺達はやってきた」という感じなのだろうか？ 登る時にはあんなに苦勞したのに、降りには実にあっけない位楽に行動が出来る。久木村が言ったが「空気が濃い」。まったく呼吸も楽になり、ゆっくりとした気分ひたれる。ベース・キャンプへ降りると、しばらく振りのくつろぎとばかり、シュルパにお湯を沸かさせ、洗顔、ひげそり、そして体を洗ってさっぱりとする。実に良いものだ。久木村は本当にこまめに動いて、次から次にと食べ物を作ってくる。こっちはもっぱらパクつく方を引き受けているが、たまにはカレー粉とマスタードの粉を間違えて、奇怪な味のするものを食わされたりする。これも作らずに食い専門の罰といった所なのだろう。ベース・キャンプでの丸1日の休養中は何をするともなく、ただゴロゴロとしていて、甘い物を食ったりしている内に過ぎてしまった。この間にも上の連中は氷河と取組んで、クレバスに、掛けバシゴを渡したり、ザイルを固定したりと、次々に高度を上げて行き、20日に遂に氷河を登りつめ、コルの所に第3キャンプを建設した。第1キャンプから見る、最後の詰めはギラギラと反射する氷の所がものすごく感じられた。実際に最後の所はコルへのたった1本のルートである沢形を見事に掘って開拓したのだ。

第3キャンプは稜線上の標高6,450mの所に設けられ、後、頂上迄は稜線伝いにキャンプを1カ所か、悪く

て2カ所設けると簡単に行けるものと思って第3キャンプへ入った。所が第3キャンプから見た南尾根は、ナイフの様なリッジになっていて、両側とも1,000m以上もスパツと落ちているのには驚かされた。第3キャンプは氷河から吹き上げる西風で、イスワ側に張り出した雪庇の根元を掘り、整地して建てられてあった。2つ目のテントを張る時の整地では、雪庇の割れ目が出てきてあわてさせられた一幕もあったが、とうとう1部はイスワ側にかかって、テントの底を割れ目が通るといった場所に建てざるを得なくなってしまった。最初に第3キャンプに入った連中も、次に入った我々も、ラジュウスが不調で、軽いガス中毒にかかってしまった。

第3キャンプから上は、まったくのナイフ・リッジとハード・アイスで、ずい分悩まされた。稜線上の工作は遅々として進まず、氷河の上部からは、夜と朝の内は晴れているが、昼近くから夕方迄は時々濃いガスに見舞われる日が多くなってきた。モンスーンの到来への心配と、ルート工作のはかどらないのとで、我々はいささかあせりが生じてきた。隊長は氷河突破の見通しが立ったので、第3キャンプへ、頂上アタックの指揮をする腹積りで登ってきた。25日に交代で休養していた隊員も登ってきたので、4月20日に先発隊を出してから実に36日振りに一緒にテントに集まった。この間先発隊が出たり、すれ違いに偵察隊が出たり、交代でルート工作をしていたので、全隊員が一緒にテントに寝る機会が無かったのだ。グーデルからベース・キャンプ迄の予想外の悪条件で、ゆっくりベース・キャンプ建設の祝いも出来ず、荷上げの荷物の整理等も交代、荷上げの順番もメモで送るといった、あわただしさだった。

我々は、高度馴化の特別な期間を設けなかった。隊長からは「荷物は絶対に背負うな。絶対にオーバー・ワークになるな。」と指示されていたので、大半の荷上げはシェルバの肩でなされた。今年はフランスのジャヌー隊、インドのエヴェレスト隊、日本のジュガール隊、日大隊と多くの隊が、優秀なシェルバをほとんど連れていってしまって、我々の予定したシェルバは得られなかった。第1キャンプ以上の氷河の上では、サーダーの氷雪技術がいくらか使えるといった位で、後の4人にいたっては、まったくおそまつなものであった。荷物をかついでいる時はいたし方なしとして、空身の時でも固定ザイルにしがみついでいて、ピッケルによってバランスを取るのよりは、手で氷に掴まる方が安全に感じているといった具合であった。しかし、さすがに高地で生活しているので、高度馴化は非常に早く出来ていた。この様なシェルバであったので、かえって徹底的に荷かつぎに使用出来、ルート工作はほとんど隊員でやった事が、今回の成功の一因となったのではなかったかとも考えられる。1人歯痛で途中から降りてしまったが、ぶつぶつ言いながらもシェルバは、結構荷上げの計画通り運び上げてくれたので、隊員はあまり荷上げに神経を使わずに、ルート工作に専念出来た。

第3キャンプからは、稜線がほとんど真北に向って延びていて、チャムランの肩に続いている。ここから見えるのは肩のあたりで、その上頂上迄はどの位あるのか見当もつかない位だった。グーデルからの途中2,3度チャムランの頂上らしきものを見たきりで、北面への偵察の時も氷河の上からも、遂にチャムランの頂上を見る事が出来なかった。氷河を登っている時、背後にいつもその岩壁を見せていたピーク41は、第3キャンプからもその姿を見せたり、かくしたりしていた。ナウレクヤメラ・ピークは、北側のゆるやかな尾根を見せていて、グーデルからの途中、うらめしい位に急峻な出尾根を出していた山とはとても思われぬ位柔かい感じのする山であった。第1キャンプから見上げていた、ジャンダルムもいつか低くなり、雄大な南西面の岩壁の横にいては、貧弱なこぶといった具合に見られた。

第3キャンプからの稜線は、テントを出ると早速、ステップ・カッティングが始まる。2,3回ピッケルを振っては一休みと、かんまんな動作がくり返される。そして所要所にアイス・ハーケンが打ち込まれ、蟻の歩みのような前進が続けられる。その間相棒は確保をしながら「養生ノさっぱり進みやがらない。こちとらは寒くなってしまう」と心で思って待ち続けている。「よしノ来てもいいぞ」と声がかかっても、飛んで行く訳には行かない。追いついた時には、口をバクバクとさせながら肩で息をついて、ベタリと座り込んでしまう。或る時などは、先に工作に行った連中と途中で交代する事になっていたが、ルートを直しながら、ザイルを固定している内に直ぐ追いついてしまうとばかり、時間を置いて出たのだが、いくら行っても追いつかない。もっとも、のろ

のりと追いかけているのだから言葉で言う程早くは歩けない。とうとう最後には、先の連中が引き返してくるのに出会うという事もあった。

氷河の上を歩いている時には、ほとんど汗をかかなかった。風がない時にはウインド・ジャッケを脱いで、カッターシャツを腕まくりをしていても暑いと感ずる位であったが、乾燥が激しいのでさっぱり汗が出てこない。少々厚着をしていても暑さは感じられるが、不思議に汗をかかない。乾燥がひどいのでのがものすごく乾いてくる。だから行動中はもちろん、テントに帰ってくると水分をものすごく欲しくなるのだ。テントに帰って、シェルパがいる時には「サーブ・ティー・サー」とくると、息もつかずに甘ったるい紅茶でのどをうるおしてしまう。好天の日はようやくのどがしめったと思うのもつかの間、そのしりからのどが乾いた感じがしてくる。一度などは紅茶、ココア、ミルク、砂糖水と、たちまちコップェルに3杯を2人でたいらげてしまった事もあった。

氷河の上部から放射状に稜線に続いている氷の急斜面は、4~500mはまったくのテカテカと光るブルー・アイスであった。稜線はほとんどの所がイスワ側に雪庇を張り出していて、上を歩く事が出来なかった。そのためルートはテカテカの氷の斜面の上部を1歩1歩、足場を切って行かなければならなかった。旧第4キャンプを稜線上の最初の岩場の下に建設したのは20日であった。ブルー・アイスの所をやっと抜けたが、まだチャムランの肩迄はかなり距離があった。第3キャンプから第4キャンプ迄の間は、ほとんどが固定ザイルを必要とする所であった。大量に持って来た固定ザイルが、最後にはとうとう不足してしまって、氷河下部の最初の頃使った固定ザイルをはずして持ち上げて来なければならなかった。次々と氷の斜面は開拓されてきたが、その間は実に苦しい期間の連続であった。稀薄な空気の中での遅々とした動作のくりかえしである。

積み重なった疲労と、モンスーン到来が間近に来て期日がどんどん過ぎていく事に対するあせりとで、この頃になるとどの隊員も程度の差こそあれ、可成り神経をいらだてていた。稜線上ではまだ偏西風が強く、ホングー・コーラ側から氷河を吹き上げてきていた。稜線を境にしてイスワ側は、好天の日でもガスを巻き上げていつも視界をさえぎっていて、わずかに風の治まった時、その荒々しい一面をのぞかせてくれた。チャムランの長大な尾根から南尾根へと、イスワ側は急峻な氷壁とけづり取られた様な岩、そして不安定な雪の斜面、これらが人間の挑戦をしりぞけているかの様に、イスワ氷河に落ちこんでいる。

第3キャンプで我々は、今後の頂上アタックをどの様にして行なうかで、大議論を闘わした。稜線上、肩に登る最後の所にある可成り大きな岩壁をはさんで、キャンプ地の設定をどの様にするかという問題である。岩場の下に第4キャンプを設け、岩場を越えてチャムランの長大な尾根の端っこに第5キャンプを建設し、そこから頂上をアタックするという案と、別案は第4キャンプは出来るだけ岩場の下に近づけて建設し、一気に頂上をアタックするというものであった。未知のルートをどの様にして登ろうかというのだから、それぞれ説を主張して決論のでる筈がないのが当り前だ。それでも自分の意見を大いに述べる事によって気分が落着いてくるのだからたまにはこんな議論も良いのだろう。結局、第4キャンプは1段上に運ばれ、岩場から続く堅当の急斜面の下、標高6,650mの地点に設けられた。

第4キャンプ附近から見たピーク41は、急な岩壁の裾に雪がわずかに残って、しま模様をなしていた。ベースキャンプ建設の頃は、岩壁に雪が真白に張りついてしたが、わずか2週間余りの内にずい分と変貌してしまった。チャムランはいぜんとして第4キャンプの上ののしかかる様にそそり立っている。しかし我々は、尺取り虫の様な歩みながら高度をかせいできた。第4キャンプからは南西面の岩壁のはしを通過して、第1キャンプの上の氷河の第1ステップ迄1,200~1,300mが一気に落ちている。ここから落ちたらものの1分もかからず下にとどいてしまうだろう。もっとも、途中2,3回岩壁にぶつかり、ばらばらになってしまうことだろう。第4キャンプでの事であったが、ザイルをはずして先にキャンプに降りてきて、ふと振りかえって見ると、確かに先程迄見えていた相棒の姿が見えないのにはびっくりしてしまった。“さあ一大変、あそこから落ちたらもう助からん。うまく途中でひっかかってくれたら良いが”“下のキャンプへの連絡はどうしよう？ 今晚中には第3キャンプ

にたどりつけない”などという事が頭の中を駆けめぐっていた。キャンプ附近をうろろして迷っている時に稜線の蔭から相棒がひょっこり顔を出したので、ようやくほっとしたものだ。

第4キャンプは、2人用のウインパーが2張り張られた。ここには4人しか泊る事が出来ないので、間もなく次の隊員と交代で第3キャンプへ休養に降りた。“この次に登ってくる時には、岩場を乗り越えて頂上アタックの頃になるだろう”と考えながら降りてくる。第4キャンプから第3キャンプを見ると、細々と続いている尾根の所にへばりついている様な感じがした。その日も第2キャンプから第3キャンプへの荷上げが、シエルバ達によって行なわれていた。第3キャンプから300m以上も落ちているひだの所を、赤いウインド・ヤッケのシエルバが、のろろと動いているのが見られた。まったくものすごいところを上ってきたものだ、感心する位の所にルートがつけられてあった。はるか下の氷河の末端にある第1キャンプが小さく見られ、そこから点々と立っている赤旗ぞいにルートが続いていた。ルートはあちこちと曲りながら、永河の上をぬって第3キャンプへと続いていた。第2キャンプはちょうど氷の棚の蔭にあり、稜線から見る事が出来なかった。

夕方や朝のまだ風が吹き始めない頃は、イスワ側もガスが治まり蒙々とした雲海の中にチャムランからの尾根の先に、ピーク6がごつごつとした頭を出していた。時折はるか遠くの方に、カンチェン・ジュンガの山塊が群を抜いて高く、黒々としたその巨体を見せる事もあった。

31日の朝、我々は上の連中と交代するべく用意をしていた時、ふと稜線の上の方に目をやると、黒々とした岩場の上の雪稜の所に動いているのが目に入った。確かに人間が2人わずかに動いているが認められた。「誰だろう」「こんな時間にあんな所に居るのだから、第4キャンプを相当早くに出たんだな」と話し合いながら、第3キャンプを後にした。稜線を行く間も常に上の2人の行動を注視しながら歩いていたが、ほとんど高度が上がらない。大分苦勞をしているのだろうと思っていた。わずかな動きが続けられ、2人がチャムランの肩の所を越してその姿が見えなくなったのは、11時近くであった。2人が前日に第4キャンプを出発して、岩場の上に雪洞を掘って泊った事の知らなかった我々は、2人の行動について、あれやこれやと想像しながら歩を進めていた。“日の出と共に出発したとすると、5時から5時半、第4キャンプの上の岩場の前後の悪場を乗り越えたのが8時、この間2時間半から3時間となる。実に快調なペースで登っている。しかし比較的らくそうに見えるその上に、2時間もかかっているとはどうした事なのだろう。消耗しているのかな。”

“今日は、頂上アタックは無理なのではないだろうか”“連中はルート工作に出たのだろうか”“登頂を予定して出発したのだろうか”と、この様な事が走馬燈のように、頭の中を駆けめぐっていた。

2、3日前から心持ち風が弱まり、モンスーンの到来を感じさせる様な天候で、暗れた空も真宵という感じはなく、にごった様な青味を呈していた。第4キャンプに着いた時、安間とサーダーが岩場を乗り越え、雪洞を作って泊り、今日頂上へ向ったと知らされて、“連中やったな”と、瞬間に感じた。

#### IV. 登 頂 記

安 間 荘

5月28日 前日1日の休養をとった後、第3キャンプから永光、鈴木、ラクバ・ツエリンと一緒に、小さな足場を辿って第4キャンプに入り、小林、久木村と交代することになった。小雪を伴った強い西風が吹くモンスーンの前ぶれの様なガスと風雪だった。第4キャンプの少し手前で小林、久木村隊と出合った。彼等は条件が良ければ登頂の予定であったが、石油ストーブの故障から軽いガス中毒を起したのだった。

5月29日 第4キャンプの上部にある黒い露岩のルート工作を、鈴木とサーダーが半ピッチ分行ってロープを固定した。この日はそれ以上進む事は不可能であり、第4キャンプに帰らねばならなかった。その夜は登頂の可能性が討議されたが、結論は露岩部は極めて困難であり、そのルート工作は予想以上の時間を要する事、モンスーンの襲来が近いのでアタックの可能な天候の日は残り少ない事などから、翌日早朝6時にここを4人で出発

し、その内の調子のよい2人がアタックし、後の2人はこれをサポートする事になったのである。

5月30日 好天の内に夜が明けたが、皆疲労の為か起床が遅れてしまい、鈴木とサーダーの体の調子がよくなく、食欲もない様だった。そうこうしてる内に時間はどんどん過ぎてしまい、既にアタックの時を失なってしまうていた。私は永光かサーダーかどちらかと一緒に2人で1日分の食糧を上げて、露岩を越えた所に雪洞かイグルーでも作り、次の日にアタックする事を考えて見た。好天が長くつづくのは期待できないので、ここで最後の努力を結集して、可成りの消耗を覚悟でアタックせねばならないと考えた。そして一緒にテントに入っていたサーダーに相談して見ると、彼は義務感からか一緒に行くと言ふ。永光、鈴木に相談して見ると、そうやって見るのも良からうと言うので、更にサーダーに念を押すと「いい考えだ。それしかない。行こう」と言ふ。念押した理由は、彼としては第4キャンプから直接アタックする考えでずっとやって来たのだが、私には、ここよりのアタックは高度差約600mあり、まず直接には不可能であり、最初から失敗すると思えられたからである。又パートナーにサーダーを選んだ理由は、彼ならばエベレストやドーラギリなど、又7,000m米の高度を経験しており、高度馴化も充分であるので、この高度に未経験の隊員2人でアタックするよりも成功率は大きいと考えたからである。露岩を乗り切る為には荷物は最小にしたが、体を消耗させぬだけのものは持って行かねばならなかった。私は高処服の上下と寝袋・カバーを持ち、サーダーは高処服の上と寝袋を1本持ち、登攀用の編みロープと固定用ロープ及び氷鋸を1本持って行く事にした。その他にテルモス3本にココアをつめ、砂糖400グラム、桃カン1個、コンデンス・ミルク、板チョコ、キャラメル、ヨウカンなどを持った、燃料はローソクの他は持たないことにしたので加工せねばならない食糧はやめた。

8時30分、第4キャンプを出て、露岩の下に着いた時に早目の昼食を摂った。露岩の下部には幅のせまいチムニーを登ると、その上にややオーバーハングした所があり、空身になって吊上げをせねばならなかった。雪のついた岩棚があり、この上は易しかったがここで1時間半かかってしまった。更に上部の1ピッチ程の所は下のチムニーよりも更に悪く、再び吊上げをせねばならなかった。アプミを使はなければならなかった程である。ここにロープを下に垂らして固定した。この露岩部は正味50m程のものであったが、全く手こずらされてしまった。もうこの上は雪面であったが、不安定であったので帰りの事を考えて、残ったロープを1ピッチ分固定した。

サーダーは手足が冷くて堪らないから、泊り場を探そうと言ふ。適当な場所がないので更に2ピッチ程上迄探してみたが、結局は元の所迄降って、泊り場作りに取りかかる事にしたのが丁度3時半頃であった。この状態はイグルー作りには不適當だったので、風下側の空洞の多い氷と柔かい雪がまざっている所に雪洞を掘る事にした。ピッケルで雪をすくい出し、入口には雪のブロックを積んだ。3時間かかりようやく仕上げると、すっかり暗くなっていた。第4キャンプに向って、「快適な雪洞だぞうー」とどなると、下からかすかに「夜は冷えるぞうー」と答えが返って来た。テルモスの紅茶をのみ、桃のカンヅメを平げた後で、空カンを使ってローソクで雪を融かしてミルクを作って飯んだ。9時頃寝ることにしたが、足が冷いだけでそれ程寒くはない。しかし明方迄ウツラウツラしたのみだった。

5月31日 眼ざめたのは5時前だった。全くの快晴だった。入口に立ててあるピッケルとアイゼンに朝陽がさしてキラキラとまぶしく光っていた。

サーダーをついても起きようとしな。しばらく寝かして、5時45分頃今度はゆすぶって起したが、彼はいかにも疲れた様な表情でシャッキリとしないので、少し大きな声で、「You go or not?」と聞くとパッと起きて行く仕度を始める。テルモスの最後の紅茶を飲みほしてアイゼンを着ける。

出発したのは6時だった。しばらくの間はトップを交代しながらステップを切りつつ登る。平らなプラトール状の所につくと、チャムランの主稜線に出る迄くるぶし迄迄の雪の柔かさだった。突然マカルーが主稜線越しに姿を現わし始めた。更にチャムランの頂上の様に見えるコブが見えた。そこには容易に到達できそうに見えたのでサーダーと顔を見合わせて、ニヤリと笑い合った。

主稜線に出ると烈風が頬を叩く。斜め前からの風なのでピッケルにすがりながなの息を切らしての登高だ。

頂上と思われた所に上ると、更にこれよりも高いコブが延々といくつも連なっている。強い風と厳しい寒さの中で全くうらめし限りだった。サーダーの顔を見る度に、もうあきらめて帰ろうかと云う言葉が口迄出かかるが、お互い無言のまま歩きつづけた。稜線は広く、なだらかで、アイゼンのツアッケがほんの少し入る程度の固さであり、30~50 cm 位の亀裂が所々に口を開けている。

12 時頃、雪庇のカゲで一休みして砂糖とコンデンス・ミルクを雪に混ぜて食べた。この為にサーダーは後になって腹痛に悩まされる破目になってしまった。ここより先にゆるやかな鞍部への下りがあり、その上に 80~100 m 位の高さのコブがある。又これは鞍部から風上側を 1 ピッチ程ステップを切り乍ら交互にトップを交代しながら登った。このコブに登り切ると更にもう一つ 50 m 程高いコブが見えた。これがまさしく頂上だった。その 20 m 程下でもう一つのコブが頂上の北側に見えていたが、それはもう手前のコブより明らかに低かった。

突然サーダーは座り込んで、ザックから日章旗とネパールの国旗を取り出し私のピッケルに結びつけ始めた。強い風の中での事なのでこんな簡単な事に大そうな時間がかかってしまう。そして彼は私の肩を叩いて、

「Mr. Anma, You go first」と云う。

「No, You go.」と云って、しばらく押し問答をしている内に、彼は旗を結びつけたピッケルを私の手に無理に押し着けた。そして私がトップになって登り始めた。一息に行きつけると思った所を 3 回も途中で休まねばならなかった。そしてやっと平らな、それ以上の高みのない所に着いた。標高 7,319 m の頂きだった。丁度 2 時だった。

2 人肩を抱きあって、意味のない声をワアワアと出し合った。サーダーにうながされて写真を撮った。フィルムを取り変える事はとてもできない。東の方にマカルー、北の方にローツェとエベレストが黒く大きくその姿を見せていた。風下側は濃いガスに包まれている。北側のチャムランの東尾根は長く堂々としたものであった。何の感興も湧かなかった。一刻も早く済ませて降りただけだった。2 時 15 分、追い風を受けて、帰りは非常に早く降りる事ができた。

## V. 撤 収

小 林 年

第 4 キャンプで紅茶を飲み、話ははずんできた。「上の連中は大丈夫だろうか」「この時間迄、頑張っているから、成功間違いなしだよ」

この間にも、時間はどんどんと過ぎていった。3 時頃にようやく上の連中が岩場の上の所をゆっくりと降りてくるのが目に入った。皆飛び出して上を見守ると、2 人は何やら叫んでいる様である。「あの連中が叫んでいるからきっと成功してきたよ」と誰かが言った。“そうだ、きっと登ったさ”誰もがきっと胸の内に、そう感じたに違いない。その後第 2 登の事について色々相談をしたが、登頂の時期が大部遅れた事、モンスーン到来のきざしが見え始めた事。第 1 キャンプ迄の撤収を安全にかつ早く行なう事等の理由から、第 2 登を断念し、アタック隊を収容し、撤収を早急に始める事に決めて、3 人は第 3 キャンプに降りていった。

4 時半頃、久木村と上の 2 人をサポートするために第 4 キャンプを出発した。岩場の下の所迄登り、大声で上に向かって声をかけたが、風に声が飛ばされてしまうのか、上からは応答がない。

「消耗して今晚も雪洞に泊るのだろうか」「いや、降りてくるかも知れん」と 2 人で話し合い、上の悪場では出合った時に、余り良い場所がなさそうなので、岩場の下で 6 時半頃迄待つ事にして、そこに腰を移して体を休めていた。日は落ちて、あたりはだんだんと暗くなって行く中で、“ああ、これが登頂成功の時の感じなのだろうか”何か“終った”という感じで、張りつめていた空気がいっぺんに抜けてしまった様な感じがしてならない。6 時半になっても上からは声がない。“きっと今夜は雪洞泊りだ”と、2 人は降り始め、10 分もしない内に上で声があったので又引き返す。暗くなった斜面の所から、最初にサーダーが、続いて少し遅れて安間が顔を出した。2

人共大部疲れている様子だった。特にサーダーはフラフラしている様子だった。「やったか?」「やったぞ」「2人とも大丈夫か?」「大丈夫」, 短い会話がかわされた。2人共自分達で降りてこれそうなので、暗くなった雪面もゆっくりゆっくり降りて、第4キャンプへ着いたのは7時も大部廻った頃になってしまった。

その夜は久木村, 安間と3人で一つテントに寝ころがり、夜遅く迄語りあった。安間は登頂の喜びをかみしめるかの様に、雪洞を作った時の事や、いくつもいくつもこぶを越して、ようやく頂上に着いた事等を話続けた。

6月1日 下から上ってきたシェルパ2人と総勢6人で、第4キャンプの撤収を開始した。久木村と2人で最後から、苦勞して作ったルートを、ザイルをはずしながら降りていく時は、何か物悲しい感じがしてならなかった。ヒマラヤ未経験の者ばかり7名で、ルートの判らない未踏の7,000mに1度の攻撃で成功したのだ。長い間計画を押し進め、我々を送りだしてくれた人達に何よりも土産が持って帰ることが出来たのだ。

第3キャンプに一泊し、そこからの撤収を永光と鈴木にまかせて、その日は一気に第1キャンプに降りた。第1キャンプでは隊長が登頂成功の報を、今か今かと、首を長くして待っていた。「隊長、成功です。安間とサーダーが31日に登りました」「そうか、良かったな」隊長はやつれた顔に、うれしそうな笑いを浮かべて、手を差しのべてくれた。がっしりと握手をして、「ああ、やっぱりよかった」「隊長はあんなによるこんでいる。これで隊長も大きな顔をして、日本に帰る事が出来る」「上の方の動きがあわただしいので、やったなあと思っていたがやっぱり報告がある迄は落着かないものだ」「上の連中は元気か」「はい」。

第1キャンプからの下りは、モレーンの丘を越した草地の所にはもう高山植物の花が咲き始めていた。歌を歌いながらベース・キャンプについた時、ローカル・ポーターの1人が飛んで来て、小さな花束を手渡してくれた。「やっぱり、連中も登頂成功がうれしいのだ」と思った。

第1キャンプを撤収し、全員がベース・キャンプに集まったのは6月4日の日であった。その夜は登頂成功を祝って、最後に残った1本のウキスキーを分けあって乾杯をした。2日前にポスト・ランナーが戻ってきて、日本からの便りが運ばれてきていた。皆は、やはり登頂の喜びをあらためてかみしめている様であった。シェルパ達も解放された気分で、シェルパ・ダンスを始め、歌を歌い出した。夜のとばりがすっかりおりてからも、たき火をじゃんじゃんたいて、その周りに体をごろごろとして夜を楽しみ、登頂の喜びをかみしめている顔、顔、そんなものが、哀調を帯びたシェルパ達の歌とゆらゆらゆれるたき火の光の中で交錯していた。

## VI. 帰途のキャラバン

久木村 久

6月9日 我々は人夫14名とローカル・ポーター2名とのキャラバンを組んでベース・キャンプを出発した。往路のルートをそのまま下るのはつまらない。シェルパの首府といわれるナムチェ・バザールを訪れてみたい、出来たらそこにしばらく滞在してソロ・クームを歩き廻ってみたいと誰もが考えていた。リュゾン・オフィサーをやっとの事で説得し(食糧が欠乏していること、外界との連絡が断絶しているから、ナムチェの前哨所から電報を打たいたいなどと理由をつけた。)既に不要になった登山道具はサーダーともう1人のシェルパをつけて往路のルートを引き返させて、我々はアムブ・ラブチャを越えソロ・クームへと迂回してグーデルに出るルートをとることにしたのである。そしてシェルパはサーダー、フルキバ、カミバサン、リンジを残して皆解雇してしまった。シェルパ達からは散々文句が出たが、こちらとしても手元不如意で仕方なかったのだ。モンスーンはどうにこのホンゴコーラに襲来しており、厚い雲が沢一ぱい埋めており、雨さえ降っていた。撤収以来ベース・キャンプでただ食って寝ての怠惰な毎日が続いていたので歩く事が無性にづらい。モンスーンの雨でつばみをほころばせ始めた高山植物をめどると称して、ツツジの花の上に腹ばいになり、息を整えたり足をほぐしたりする。雲が切れて山が見えると、ポーター達に「あれがチャムラン・ヒマールだ。サブ達に登った所はあそこだ。沢

山の雪があったぞ」などと手振りと言って見るが、彼らはちっとも関心を示さない。どうしてこんな所迄山登りに来るのかを説明することは不可能だ。日本にいてさえ、自分のフラウにさえちやんと説明できなかったのだから、それをましてや彼らに分らせようなどとは無理な話だ。彼らにはどこか分らんが外国からの遠征隊が来て、飯の種になればそれでいいのだ。シェルバ族のこのポーター達にはネパール人には見られない、かなりの融通性がある。それが一層キャラバンを楽しくさせる。このポーター達のある者はそのまま日本に連れて来ても、そのまま順応してしまうのではないと思われる程だ。

ホングーコーラを上部へとつめて行くに従い、正面に見えているローツェとバルンツェが段々大きくなって来る。バルンツェは無数のヒマラヤひだを持った純白の美しい山だ。その背後に対象的なローツェの黒い南面がきり立っている。我々を威嚇するかの様に黒い山容をゆすぶらして、白い煙をふき出している。8,000 m の山は7,000 m の山と比較にならない程風が強いであろう。

ホングーコーラは氷河に変わり、縦横に起伏するモレーン地帯にかすかな踏跡があり、所々にはケルンさえ積んである。途中安間がハンマーを振って「ここにはザクロ石が沢山あるよ」と云うと、それ迄は石ころなどには全く見向きもしなかった連中が、ハンマーを奪い合い、にわか山師になる仕末だった。マニク造もが目の色を変え出した。結局何時間も大の男が6人かかって掘り出したのは一にぎりの風化したアズキ大のザクロ石と、辛うじて判別できるだけのものだった。

パンチボカリのキャンプは全キャラバンを通じて最も快適な所の一つだった。夕日に映えたチャムランがあり、氷河湖の冷たい水があり、おまけにドリーム・オブ・チャムランと名付けた特製コクテル迄あった。これは昆虫固定用のアルコールにありったけの雑物を混入したものである。

翌日のアムブ・ラブチャ越えは、かなり厄介な代物だった。我々はシェルバ達からの話で、すっかり甘く見ていたのだ。峠迄は鼻唄まじりで上ったものの、その北側の急斜面にはべっとり雪がついており、はだしのポーター達を降ろすのに、荷物を半分にしたたり、ロープを固定したり、ステップを切ったりしなければならなかった。この5,800 m の峠越えのために午後一ぱいかかってしまい、その日は山羊を1匹つぶし、ロキシーを飲み呆けると云う夢はむなしく、雪の降りしきる中で満足なたき火もなく過ぎねばならなかった。

イムジャコーラにそって下るにつれ、シェルバの故郷にふみ込んだと云う感が強くなる。チベット風のスレート積みツツの夏小舎、ズムや山羊の糞を見つけるにつれてだんだん人間の住んでる気配が濃くなって来る。6月のこの季節ではまだこの5,000 m の放牧地には草が充分伸びてはいないが、草の伸び具合を見て来た村の男達に出合った。

「サーブ連よ、早くパンボチュェに行きなせえ。ドウムジのラマの踊りが丁度今日あるんでさあ。チャンもロキシーも飲み放題ですぜ」と云うのに、ズムの乳を飲ませてくれと云うと、鍋1ぱいのミルクを湧かしてくれてお代は好きだけ置いて行って下せえ、と云う。そんな好意は一生をこのソロ・クームで暮したくってしまう程の感を抱かせてしまう。

うっそうと茂った木立ちをくぐってパンボチュェの部落に入ると、そこはまさに眼にしみる様な白い家と深い緑につつまれた理想郷理想郷の機だった。部落の中程にあるゴムパからはにぎやかな人の声とラッパや太鼓の音が聞えていた。村中、いや近隣の村からも総出でラマ僧の踊りを見物している所だった。たちまち我々は村人に取り囲まれてしまった。

フルキパの親類の家に6ルピーを払って泊り込む事にした。頭をゴツゴツとぶつけ乍ら、暗い2階の部屋に上がり込むと、そこは家族の居間兼寝室兼応接室兼台所である。彼らの生活を見ていると簡素な生活様式の内にも古い伝統のあるチベット文明と云う深淵をチラッと覗いた様な感じがする。この感じはネパール人の家では感じられなかったものだ。ヒンズーの文明とは全く異質なものである。ややこしい操作を必要とするチベット茶を作る竹筒にしても、銅製の茶器などを見てさえそう思われる。

フルキパの引っぱって来た山羊を50ルピーで買って、やっと念願のパーベキュー・コンパが開かれた。丸々

1匹の山羊が我々8人の胃袋にすっかり収まってしまったのである。バラサーブは隊員達が久し振りの生肉にありついて嬉しがるのを見て大いに気をよくして、会計係の小林に圧力をかけてロキシーをドンドン買い込ませた。かなり酔っぱらってしまってからゴムバヘラマ僧の踊りを見物に行く。ゴムバの前庭では猿のお面や真白な顔をした怪物のお面をかぶった悪魔を象徴する踊り手が、金糸でふち取った紅衣のラマ僧に、さんざんなめに合わされると云った様子の踊りがくり抜かれる。おはやしはタングルと呼ばれる5mもある笛や太鼓である。ラマ教にはチンプンカンプンの我々にも、見ていて飽きない面白いものであった。ゴムバの中に入ると我々はこの寺に25ルピーの寄進をしたと云うので、大きなにぎり飯と特別製と称するロキシーでいともてい重にもてなされる。その内に黒衣のラマ僧の長と云うべき人物がブショウ髭を生やしたままで現れ、一渡り挨拶をした後もう100ルピー出せば雪男の頭皮とミイラ化した手を見せてやると云う。我々はそんなに払わなきゃいかんのなら見なくても結構と立ち上がりかけると、待て待て、お前さん達は特別だ。10ルピーで見せてやる、と云う。持って来たのを見ると、頭皮は今迄に写真などでお目にかかった事のある例の代物だった。手にとって眺めると全く珍妙なものだ。バラサーブはその毛並みから見て高等な猿又は類人猿ではないと言う。又ミイラの手なるものは明らかに人類、それも女の手で雪男なんかでは絶対ないと言う。シェルパなんかの話聞いても、どうも雪男と云うものは作り話の感がする。

夜になるとゴムバの中は村人達で一ぱいになり、村の若者達の踊りが始まる。ゆるやかなテムボの混声合唱に合わせて、肩を組み合せて足を踏みならすシェルパ達の踊りは、いつ迄見ても飽きない程魅力的なものだ。時々調子が高まるとテムボが早くなり、ステップも激しいものとなる。お終いにはとうとう我々も踊りの中に入って、ギゴチなくステップを踏んだ。見物人は喜ぶまい事か、リンジンは今夜だけ貸して貰った高処服をほこらしげに着込んで、村人達に如何にこのサーブ達は話せるサーブ達であるかを強調している。強いロキシーを飲んだ後この様に体を動かすと、お負けに標高は4,000mであり、息が切れる事おびたしい。宿に帰ると皆死んでしまった様に眠ってしまった。

翌日はナムチエへの行程である。エベレスト、アマダブラム、カンテガ、タームセルクを眺め乍らのこの行程は全く楽しいものだった。

ナムチエに着いた時は雨だった。ドウドロシの流域のきり立つ様な斜面に引っかかった様にして50~60の人家のある部落である。思ったよりも汚く陰鬱な感じのする所である。石をつみ上げて囲いのしてある畑の中には馬鈴薯が植えてあり、家と家の間の細い道はすっかり泥んこである。全く1年中霧ばかりかかって、日の当る事なぞない様な感じを受けた。フルキバの家で泊る事にする。このナムチエで安間、鈴木、私のパーティとバラサーブ、岡本、永光、小林のパーティとに別けて、我々はナムチエに1カ月滞在し、その近辺の地質調査、昆虫採集、作物調査を行ない、バラサーブのパーティは一足先に帰る計画になっていた。所が、所持金を分配するに当り、どうしても滞在組の分の費用がでないと云う。ポーター費に予想以上の金がかかった事、出発後に分った今年からネパール政府が取り決めた、遠征隊の持ち込み物品には関税をかける、と云う規則などで予算はむしろ赤字であるから、我々の滞在は止めて欲しいと云う事になってしまった。この事について議論百出し、はてしがなかった。結局はバラサーブの命令で全員一語に帰ろうと云う事に落着いたのだった。マニクももし別れるんなら滞在組と一緒に行くとともにすると云っていたが、この結果を聞いてホッとした様だった。翌日は1日休養することにし、前哨所チンツェンに行ってネパール外務省に、我々登山隊の成功を知らせる無線を打って貰ったり、シェルパの家によばれてチャンやロキシーのごち走になったり、シェルパの踊りに加わったりした。例の足踏みする踊りではなく、子供達の踊るのに、4人で輪になってぐるぐる廻りながら手や足を活発に動かして踊るのがあったが、これは又面白いものだった。彼らが「カンチェンジュンガのふもとを廻ってダージリンに行かないでお呉れ」と云う歌を歌い乍ら踊る様子は何とも云えない感傷的な気持ちにさせてしまう。古い因習と家族制度を嫌ってダージリンへと故郷を捨てる若い男達を引き止めようとして女達の歌う歌だそうであるが、こんな悲しげな歌を背に聞きながら村を出て行く男達はよっぽど胸をふさがれる思いがしたに違いない。ダージリンのテンジン・ノルケイ・ロ

ードの下にひっそりと暮しているシェルバ達は食う為には、又故郷の山々への荷担ぎにやって来ねばならなかった事を考えると、どちらが幸福なのか分らない。前哨所<sup>オニツツボ</sup>の隊長も6カ月交代の任期が終るのが待ち遠しい、ここには何も楽しみがないとこぼしていた。

丁度この頃ギャチュンカンを目指したアメリカ隊が行方不明になっているとの事だった。後で分った事だが彼らは無事で発見され、ベース・キャンプからヘリコプターでカトマンズへ運ばれたそうである。そして又可能性のある登路が発見されたそうである。

ナムチエから、ドウドコシに沿ってのキャラバン中は、食糧も馬鈴薯、トウモロコシなどなら豊富に手に入る事ができたし、嬉しい事に卵迄も買う事ができた。1ルピーで4~5個、タバコをお負けにつけて6個である。畑には馬鈴薯の他に大麦、小麦、ソバ、豆などと作物も豊富になって来た。ナムチエを出てから3日目、フルキパが突然家に帰りたいと云い出した。

「私、熱があって大変苦しい。後2日すると私は死ぬ。サーブに迷惑がかかるから、家に帰って死にたい」大げさな云い方もあるもんだと思ったが、本人がそう云うから仕方がない。ナムチエで彼は妻君から散々コスキ廻されていた。高処ポーターとして家を出たのに、実際にはローカルポーターとしてしか使って貰えず、装備も何も貰えず稼ぎも少なかったのを、妻君は途中で女と遊んだりして費ってしまったのだと考えているらしかった。お負けにパンボチエで彼が女にちよっかいを出してもめ事となり、20ルピー払って勘弁して貰った事がバレていたのだろう。大の男のフルキパが自分の家で小さくなっていったのを思い出した。妻君がそんなケチなサーブ達について行く事はない、チベットへ交易のキャラバンに行った方が儲るから、何か理由をつけて帰って来いとチエをつけたに違いない。それならば仕方がないと給料を清算して帰してやる事にしたら、イソイソと自分の荷物をまとめ、しっかりした足どりで行った。我々はここでついでにリンジンも盗癖があると云う理由から首にしまった。シェルバなしのボーダーだけのキャラバンが始まるわけである。英語を曲りなりにもしゃべるシェルバがいなくなってしまつて随分不便な事になってしまい、コックの役をサーブで交代してやらねばならなかった。ポーターの中から一番正直そうなのを2人キッチンボーイとして使う事にして、言葉は我々の乏しいシェルバ語、ネパール語のボキャブラリーを手まねを加えてフルに活用する事にして、キャラバンは続けられた。我々にはマニクがいるのでさして不便はなく、返って遠征隊ズレのしたシェルバと一緒に歩くよりも、ボクトツなポーター達とのキラバンの方が好ましい場合さえあるものだ。ラクパ・ドルジと云う19歳位の若者がいたが、彼は全く愉快な男だった。こちらで教える英語の覚えも早く、殊にキャラバンの後半、女シェルバがポーターに加わる様になってからは一層張り切ったものだった。アムブ・ラブチャ越えの時彼が寒くて、恐くてワアワア泣いた為に、ミクチュウ・シェルバ(涙のシェルバ)とサーブに仇名をつけられてしまった。ポーター達の中で只1人映画を見た事のある男であった。

ドウドコシ沿いの最後のキャンプ、パンコーマで我々は1日の休養を取った。この1日を利用して私と安間とでカリ・コーラへ行って見た。ナムチエで聞かされたカリコーラはとても豊かな部落で、沢山の豊作物がとれると云う事を思い出したからである。途中立派なゴムパのある所で、ラマ僧に呼び止められてチベット茶とロキシーを出されるが、チベット茶には全く閉口する。あの味になれるには1年や2年じゃ不可能であろう。何しろタン茶を濃く淹れたものにギーと塩をたっぷりと入れ、竹筒の中で激しくかきまわしたものである。このラマ僧は英語はおろかネパール語も解さない。全くの手真似だけである。その内に彼が引張り出して来た書類を見て、彼がラサからの避難民である事が分った。そしてカリ・コーラの村人達が彼の為にゴムパを建て、学校を開かせている事が分った。私達にジャガイモをゆでるから食って行けと云うのを辞退して、羊羹を1本寄進した。私が今迄会った中で一番知的な感じのするラマ僧だった。真白な歯を見せてニコニコ笑う彼の顔を見ていると、ラサの僧院を逃れて遠く1人ぼっちで暮している彼が気の毒で仕方がない。ラサから持って来たと云う沢山の経典のつんである棚などを見ると余計にそれが感じられる。

毎日雨にぬれない日はない。大抵夕方キャンプ地に着く時は皆ぬれぬずみである。人家のある所ではなるべ

くテントは使わず、強引に人家に泊り込むのである。国民の20%は常に旅をしているのであるから、旅人に一夜の宿を乞われたら余程の理由がない限り断る事ができないと云うことが、宿夜の設備などない山奥では不文律になっているようである。泊り代は薪代と称して、8人泊って3~5ルーピーである。夜雨が激しく降る時は今更テントなどで泊る気はしない。

ドウドコシから峠を越え、イヌク・コーラに出ると立派な屋根つきの橋がかかっている。ここではイヌク・コーラはゴルジュの中をゴウゴウと流れている。上部には大きな氷河があるに違いない、水は蟹母を含み褐色に濁っている。ここから更にもう一つの峠を越えてホングー・コーラへと下るとやっとネパール人の部落が現れる。成熟したトウモロコシ畑を降りて行くとブンと云う部落がある。標高2,600m位で、低所の水の豊富な所では水稲さえ作られている。対岸のグーデルへ行くには700m位をホングー・コーラの河底迄降り、又700mも登らねばならない。深く刻まれた河谷をこれ程うらめしく思った事はなかった。

グーデルでは食糧係が特別にヒモをゆるめて鶏を2羽買い込んで来た。久し振りに食べるチキン・カレーであった。飯を食べた後は日記をつけたり、碁をやったりするのが常だった。或いは新しく仕入れたネパール語を皆に披露したりするのである。

ナムチエを出てから15日目でグーデルに着いたのだった。帰途の丁度半分であった。

グーデルからサルパ峠迄は往路と同じルートであり、雨の中をグシヨグシヨになって歩かねばならなかった。サルパ峠を越えてからは往路のルートはモンスーン中なので川沿いの道は増水して歩けないので、尾根道を歩く事になる。ジョルジャレカルカ、ジュゲカルカ、エクラデカルカを泊り歩いた時は、モンスーンの雨の一番激しかった時だった。連日朝から晩迄降り通しだった。夏の間だけの放牧地なので、食糧を買い込む事は全く不可能である。ジョルジャレカルカで買い込んだ山羊は、殺して食べる機会がなく2日間も我々と一緒に風の強い雨の中を歩かせられたあげく、やっと我々の胃袋に入ったのはめっきりとヤセこけてしまってからだった。キラと我々が名付けた、グルカ連隊旗とユニオンジャックを腕に入墨した男が、ククリでバツサリと頭を落した時には悲しげに一声泣いただけだった。彼は慣わしとして、屠殺の代償に山羊の頭とひずめと内臓のレバー以外の所を受け取った。雨の激しくも竹ぶきのこわれかけた小舎で、火をチョロチョロと燃やし乍ら、殺し立ての山羊の肉を食べる機は、とても雄壮な遠征隊には見えない。我々の遠征中の一番シボボタレタ時であつたらう。この幾日かはガスと雨で何も見えない泥んこ道を、グシヨぬれになって歩くだけだった。

エクラデカルカからは道はボジプールの脇を通りアルン河へと降りていた。この辺はもう全くの亜熱帯的な地帯であり、ヤクビルタでは田植風景が見られる。猫のひたいのようにせまい、斜面のステップ水田に水牛2頭引きのプラウを使っている。方向を変える時に落ちてしまうんじゃないかと思うが、彼らは器用にせまい水田の中で方向転換をやっている。何百年続けられて来たやり方であろうから、取えて生半可な口を出さない方がよい。ここで、水稲の種子を分けて貰おうと思って、田植えをしている男を掴んで「ダン・ピース・ツア？」(稲の種ありますか?)と云うと、「ツア、ツア」(ある。ある)と云うので、「アリ・アリ・テヌ・ホス！」(少し、下さい)と云うと、よしよしいくらでもやるぞとばかり、苗代の苗を一掴み引き抜いて、さあ持って行けと差し出す。「そうじゃない、ピース(種子)、ピース」とくり返すが一向に通じない。彼はこれがピースだと云って聞かない。そうじゃない、もっと小さくて、その苗についているもみが欲しいのだと身振り、手振りで説明すると、彼はこの苗がそのもみになるのだから、これを持って行けばいいのだと云う身振りをする。その苗を貰って引き下る他なかった。そして彼がその苗をどうするのかと聞くので、「ジャパニ・ガオン(村)で植えるのだ」と答えた。ネパール人達もこの様な田舎になると、日本と云ってもどこにあるのか分らない。グルカ兵として日本軍と戦った経験のある者ならそれより少しは知識を持っているが、大抵のネパール人は、ジャパニ・ガオンと云う少し南にある部落だとしか考えていない様である。

アルン河を丸木舟で渡り、レグアガートに着くと、のど自慢の仲々魅力的な年増盛りのオバチャンのいる雑貨屋で泊った。彼女とは往路のキャラパンの時から顔なじみになっていた。この日は特に我々の為に、一番の

正装で現われ、何くれと我々の世話を焼くのがだった。アルン河で我々は70日振りの水浴をした。誰かがオパチャンが旦那がちゃんといっているのに、わざわざ隣りの部屋で一人で、しかも扉を半分開けたままで寝ていると報告したので、大変な事になってしまった。隊員の誰が一番良く日本男児を代表するかがヒソヒソと議論された。皆あらゆる妄想で夜遅く迄眠られなかったらしい。

レグアガードからはピラトナガール迄往路のルート通りであったが、ダククータでは行きの時とは違った空気が感ぜられた。役所のある所は四囲に土のうが新しく築かれ、ライフルを担った衛兵が番をしており、グルカ兵のパトロールが歩き廻っている。マニクの聞き込んで来た話によると、東の方でコイラ元首相派の国民会議派がゲリラ活動を始めたらしく、警官が殺されたり、前哨所が襲われたりしたので、その警戒が厳重になったのだとの事だった。ネパールの政治情勢はまだ安定したものではない様である。

7月8日 フスレに着くと、サーダーとカミ・バサンが待っていた。彼らは10日前にここに到着して我々を待っていたのだ。これで我々のキャラバンの全行程が終了したのである。

ピラトナガールの税関では遠征隊の物品関税として、我々の会計係が見積った約6,000ネパールルピーをはるかに下廻る、2,800ネパールルピーで足りる事になったのだ。

ピラトナガールでの手続きを一切済ませると、隊長と安間と鈴木はカトマンズへ飛び、ネパール外務省への報告を済ませて、更に来年西ネパールのナル・カンカール(7,335 m)に遠征する許可をとる手続きを済ませて、ニューデリー経由でカルカッタに向った。鈴木は、ナル・カンカール遠征の際の入国地点となるネパール・ガンジに行き下調べを済ませて来た。岡本はカトマンズよりポカラに飛び、アンナ・プルナとマチャプチャリを運よく眺めて帰って来た。ポカラはナル・カンカール遠征の際のキャラバンの終点の一つになる予定であったからである。永光・小林はダーズリン、ニューデリーを経由してカルカッタに向った。私はカリンボンのブータン・ハウスを訪れ、ブータンに入国する可能性について調べた後、シロンを経てカルカッタに向った。

7月30日 カルカッタを後にし、8月4日羽田に帰国し、我々の遠征隊は全日程を終了したのである。

## VII. 装 備

久木村 久・鈴木良博

今回の装備の計画作製に当り、我々が最も大きな指針としたのは、第1次、第3次のマナスル遠征隊のものだった。此の遠征隊は、我々とは較べものにならないほどそのスケールに差があり、そのために、各品目とその数量の決定には少なからず困惑した。しかし、他隊の装備計画を参考にしつつも、結局最後の決定のさいにはやはりマナスルのそれに長らざるを得なかった。

なお、今回の一般装備の準備に当っては、次の7つに分けて準備を進めた。

- I キャラバン用個人装備
- II 高所個人装備
- III キャラバン用一般装備
- IV 露 営 用 具
- V 高所用炊事用具
- VI 登 攀 用 具
- VII 通信・観測器具類

次に、特に我々がその装備について感じた主な点について簡単に述べる。まず繊維製品についてだが、使用した材料は大部分がテトロンであった。テトロンの利点は次の3点に要約できる。それは、他の化学繊維に比し総合的に強度に富むこと。保温力に秀れていること、防水加工がほとんど完全に施しうることである。欠点は、他の繊維に較べ比較的に重いということである。しかしながら、前記の3つの利点は此の欠点を補って余りある

ものがあると考えたので、可能な限り此の繊維を使用した。例をあげれば、ミード型2人用テント2張りを除いて、全ての天幕をテトロンで作製した。使用の結果には満足している。又、登攀用のザイル及び固定用ザイルにも全てテトロン製を用いた。キルティング加工した寝袋、高所服に関しては、此のテトロンの性能でももう少し綿の量を増す必要があると思われる(重量附図参照)。登攀用具については、今までの常識の範囲を出なかったがただアイスピトンの平型はほとんど使用の機会が稀れて、大部分持ち帰った。ジュラルミンパイプの頭部25cm程にボルトをうめこみ、3ヶ所の穴をあけたスノーピトンを使用した。これは、全長80cmもあり、特に氷河上の軟雪地帯で使用したが、非常に有効であった。非常に乾燥した積雪をもつ、風の強い尾根上にキャンプしなければならぬ事態も起りうるので、テントのベグには一考を要する。登攀用具のうち、固定用ロープ、縄ばしご及び掛ばしごの量の決定に当り非常に困惑したが、チャムランに関しては、携行した量でどんびしゃりであった。此れは極めて幸運な例で、未知の山へ此のような道具を大量に携行するのは、輸送の問題とも関連してくるから、無謀に多量に携行するよりも、不足分を補う路を充分考慮してゆく方が良いと思われる。具体的には、我々はもし前記の器具に不足をきたした場合には、針葉樹による補充や固定用ロープとあぶみ用ステップとを転用することを考えていた。しかし、幸いに此のような事態には遭遇しないようなルートを発見出来たことは幸運であった。又、天幕のうちミード型8人用については、我々はついにこの天幕を第Ⅲキャンプまで上げなければならない破目になったが、ナイフリッチ上にキャンプしなければならないことが予測される場合には、最大4~5人用におさえるべきである。

炊事用具について述べると、ストーブ類は石油ストーブ、プロパンガスストーブなどを併用したが、プロパンガスは100%プロパンを使用した。これに使用したレンヂは、一般家庭用のものだったが、点火装備及びガス量の調節部分がより堅固であり、かつ操作が簡単なものが望ましい。しかし、使用結果はほぼ満足すべきものであった。出来たらポンベの重量の軽量化を計ることが望ましい。石油ストーブでは国産品は全く駄目だった。

アイゼン・ピッケルに関しては、札幌角田製作のものを使用した。全く破損はなかった。鋸はネパールで購入出来ないものであり、現地民もその使用を知らないから、必ず携行しなければならない。冬期をはおき、他の季節には雨具は欠かせないものであり、プレモンズンでさえも、豪雨に見舞われることは常であるから、ポンチョ風のものが最も有効ではなからうか。又、カルカッタの警察官が使用しているような、手をつかわずに使用出来る雨傘は特に採集旅行をしたりする場合には欠かせない。可成り高い峠越えや、氷河上の旅をする場合には、ポーター用の簡単な足ごしらえも用意していなければ、キャラバンを拒否される場合があるので、充分考慮しなければならないだろう。インドないしネパールで入手出来るマッチは非常に質が悪い。石油などは全く良質なものが、ネパールとインドとの国境近くの町では何処でも入手出来る。しかし奥地では、多量には入手不可能であろう。トランシーバーについては、キャラバンの中途まで、実際は10日目についたグーデルガオンまで使用出来たのみで、11日目のキャラバン終了後、電池をとりかえたのを最後にぱたりと通じなくなってしまった。此の原因の調査はまだ済んでいないが、恐らくスベア電池の故障ではないかと思われる。

カメラは、オリンパスペンEE、オリンパス35、コニカIII M、ライカ、ゼンザプロニカ及びキャノンP等はいずれかの部分が破損してしまい、中には全く使用不能になったものもあった。我々は、帰りにキャラバンで長期間にわたる高湿度の中を経由してきたので、一部のフィルムは湿気のために薬面が駄目になってしまった。それらのフィルムはパトローネのまま単にポリエチレン袋に入れられたのみだったので、此のようなことになったのであり、フィルム保存の問題には充分すぎる考慮が必要である。缶入りのものは良好の状態で保存されていた。

装 備 リ ス ト

露 営 用 具 類

品 目	数量	単位重量kg
ミード型 8 人用テント	1	13.0
"    4 人用テント	2	9.1
"    2 人用テント	2	6.0
カマボコ 6 人用テント	1	11.2
家型 8 人用テント	1	11.2
"    4 人用テント(フライ付)	2	7.9
キッチンテント	1	7.5
ルーヌテント	2	5.1
ツエルト	1	1.5
スコップ	4	1.2
テント修理具	3	0.8
2 人用寝袋(2重)	2	8.0
雪 ブ ラ シ	10	0.1

高 所 用 個 人 装 備

高 所 服(上下)	13	2.0
防 風 着(上下)	16	0.5
長 ズ ボ ン(カシミロン)	9	0.6
カッターシャツ(毛)	13	0.4
セ ー タ ー	14	0.6
厚 毛 下 着(上下)	16	0.6
薄 " (上下)	13	0.5
ノルディックソックス	13	0.2
パイルソックス	8	0.08
テトロンパイル	21	0.2
犬毛皮手袋	16	0.2
オーバー手袋(綿入)	14	0.1
オーバー手袋	14	0.07
皮 手 袋	13	0.15
毛 糸 帽 子(目出)	16	0.05
"    ( 厚 )	7	0.15
雪 眼 鏡	27	0.13
寝 袋(内側)	13	2.0
寝袋カバー	13	0.35
エアマットレス	39	0.6
マットレスポンプ	8	0.4
登 山 靴	8	2.3
オーバーシュー	17	0.5
"    (綿入)	13	0.95
安全ベルト	13	0.4
テ ン ト 靴	10	0.4
手 袋(毛)	19	0.1
"    (ナイロン)	39	0.09

"    (2本指)	10	0.1
サンクリーム	14	0.05
ス カ ー フ	15	0.01
キスリング・ザック	8	1.0

通 信 及 び 観 測 用 具

トランシーバー	4	1.0
ポータブルラジオ(8石)	2	0.9
"    (6石)	3	0.4
高 度 計	1	0.5
温 度 計(最高最低)	5	0.2
"    (普通型)	5	0.05
小型トランシット	1	1.0
ハンドレベル	1	0.1
メ ー ジ ャ ー(10 m)	1	0.17
"    (30 m)	1	0.44
カウ ン タ ー	2	0.1

キ ャ ラ バ ン 用 個 人 装 備

寝 袋(1人一重外側)	13	2.0
カッターシャツ	13	0.28
下 着(上下)	13	0.3
ストックキング	13	0.3
パイル靴下	26	0.16
紳士用靴下(薄)	32	0.07
"    (厚カシミロン)	18	0.11
木綿長ズボン	13	0.5
ナ イ フ	13	0.2
食器セット	13	0.1
皮 ベ ル ト	8	0.12
布 ベ ル ト	5	0.1
布 袋	13	0.06
サブ・ザック	8	0.35
雨 具	13	0.07
パ ン ツ	37	0.07
ランニング	8	0.09
キャラバンシューズ	16	1.4
ナ タ	1	0.44
アンダーシャツ	9	0.2
丸首シャツ	8	0.12

高 所 炊 事 用 具

ケロシンストーブ(大)	2	6.2
"    (中)	2	1.8
"    (小)	3	1.2
プロバングガスボンベ	3	23.0
"    レンジ	2	2.7
"    コンロ	1	8.4

コッヘル	2	2.0
ケロシンボンブ	3	0.05
<b>登攀用具</b>		
登攀用ザイル(40 m, 8 mm, 編)	3	2.0
"    (36 m, 11 mm, 撚)	1	3.9
固定用ザイル(100 m, 11 mm, 撚)	1	9.1
"    (200 m, 8 mm, 撚)	3	9.9
"    (300 m, 6 mm, 撚)	1	9.1
なわばしこ(10 m)	3	7.6
"    ステップ	19	0.2
あぶみ(2段)	4	0.5
"    ステップ	10	0.1
ジュラルミン梯子	2	6.5
カラビナ(O型)	52	0.12
"    (D型)	26	0.12
ナス環	30	0.05
アイス・ハーケン(U型)	12	0.2
ピッケル	10	1.0
アイスパイル	3	0.8
アイスハンマー	4	0.6
ロックハンマー	3	0.54
ジュラルミン背負子	6	2.2
シュタグアイゼン(10本爪)	7	0.8
"    (8本爪)	10	0.9
"    バンド	24	0.06
スキーストック	8組	1.75
デポ旗	600	0.03
テルモス	37	0.5
氷鋸	2	0.5
<b>キャラバン用品</b>		
石油	168ℓ	19.0kg
ナイロン平紐	50m	1.5
荷札(紙)	900	0.007
"    (布)	160	0.009
人夫用番号札	200	0.005
懐中電灯(棒型)	11	0.2
ヘッド・ライト	10	0.45
電球スベア	50	0.002
バネ秤り(30 kg)	1	0.6
"    (50 kg)	2	0.9
フライパン	2	0.6
アルマイトボール(大)	13	0.8
"    (小)	13	0.6
アルマイト皿(大)	13	0.1
"    (小)	13	0.05

シヤクシ	4	0.1
しやもじ	4	0.03
ホーローボール(大)	3	1.2
ホーローボール(小)	5	0.8
ポリエチレン袋各種	650	全重 1.5
アマニ油	3ビン	0.14
軍手	15	0.05
綿テープ(250 m)	1	2.5
細引(200 m)	1	5.31
家庭用石油コンロ	2	6.2
釣道具	1	0.03
ストローハット	13	0.05
綿糸(50 m)	1	0.1
ビニールテープ	6	0.05
金たわし	4	0.1
かめの子たわし	10	0.1
餅あみ	2	0.12
カン切り	10	0.04
包丁	4	0.56
おろし金	1	0.04
のこぎり	1	0.4
工具セット(大)	1	3.8
"    (小)	1	1.0
錠前(中)	16	0.05
靴ひもスベア	23	0.01
散髪用具	1	0.57
チョッパー	1	2.5
ポリタンク(2ℓ入)	13	0.5
ポリエチレンビン	23	0.2
ホークセット	8	0.1
針金(50 m)	1	2.0
手拭	16	0.06
タオル	19	0.08
安全カミソリ	30	0.002
トイレットペーパー	21	0.14
ヘア・ブラシ	2	0.08
洗濯石けん	40	0.1
シャンプー	50	0.05
粉石けん	5袋	0.57
石けん箱	8	0.03
ローソク(小)	218	0.03
"    (大)	120	0.05
マッチ	770	0.01
マジックインキ	1打	0.6
雨傘	9	0.47

ポリエチレンバケツ	3	0.35	高 圧 鍋	2	1.9
シ ナ 鍋	2	1.2	手付コップ	13	0.15
さらし木綿	2反	0.4	金 袋	5	0.18
マ ッ チ (大)	288	0.01	タイプライター	1	4
” (小)	480	0.005	スリオンテープ (巾広)	25	0.75
く つ 油	2	0.065	と じ ぎ る (大)	2	0.14
鍋 (大 30 cm)	2	0.9	” (小)	2	0.08
” (中 26 cm)	3	0.5	フライ返し	2	0.08
” (中 24 cm)	3	0.5	メス・カップ・セット	4	0.1
” (小 20 cm)	8	0.35	砂 糖 入 入 れ	1	0.4
や か ん (2 匁)	3	0.35	メス・ティン	8	0.4
は ん ご う	8	0.5	薪 ス ト ー プ	1	17.0

## VIII. 食 糧

鈴木 良 博

此の度の我々の食糧計画の根本原則は初期のヒマラヤ遠征隊、例えば、マナスル遠征隊のような和洋折衷ではなく、我々の日常の食事を可能な限りで合理化して携行するというものであった。従って食べ馴れているということが第一条件であったので、夫々個々の原材料をうまく合理化させてゆくことに重点をおいた。それ故にマナスル遠征隊の食糧計画を批判的な意味で参考にはしたが、本当の意味での指針としたのはヒマルチュリ登山隊のものであったといえよう。

主食の合理化ということは、現状の日本の食生活から考えると非常に困難なものと感じていた。従ってマナスルとヒマルチュリ登山隊の経験に基づいて、アルファ米を主食の核とするのが最も妥当であるように考えた。これも我々の理想ではなかったが、現実にはこれ以上のものを入手出来なかつたので致し方なかつたと思う。唯現在この問題が着々と解決されつつあるとの報に接し 嬉しく思っている。(それはアルファ米化した米の理想的な乾燥法にあるのだが)。

主食に関しては又普段の我々の山行の経験から、1日1回の粉食を持つことは当を得たものであり、それは嗜好面でも支障を来たすことなく、而も軽量化、調理の迅速化が出来ることを学んでいたもので、このことも問題なく取り入れられた。その結果出来上った食糧計画を見た一部の人は、これがヒマラヤ遠征隊の食糧計画かという意見を表現した者もないではなかつた。

しかしヒマラヤというものをそう特殊なものと考える必要はない。変に問題を拡大視したり、矮小化したりすることは危険なことであると思う。常に自己の経験と他隊の貴重な資料を基にして、更に自隊の独創的な青写真を求めるべきであらう。その結果は自ずから自分達の双肩に懸ってくるのだから、徒らにヨーロッパ化を追求することの危険は自明の理である。一方日本人の食生活はヨーロッパ人の普段のそれに較べて遙かに変化に富んだものである。それであるからこそ彼等がソーセージを丸嚙りし、ビスケットを食い、コーヒーを飲んで2日も3日も歩き続けるという事実を直ちに真似ようとしても、その結果は判り切ったことだ。それ故に此処で言えることは我々の日常の食生活そのものを尊重しつつ、其の不合理的を如何に解決して行くかという方向に、今後の遠征隊の食糧計画をもって行くのが最も妥当ではあるまいか。

以上の意見は遠征から帰っての反省後も何ら変わることはない。唯、大局から見て我々の事前の食糧計画と実際のものとの食い違い、結果として失敗に終わったものは献立とレーションと缶包との問題であった。この三つを如何に有機的に結びつけるかは、現地へ行って実際の登山を開始してからの行動に重要な影響を及ぼすもの

である。

そのようなことは判りきっていることであるが、今迄の数多くの遠征隊がそうであるように、準備期間の短時日と僅少の予算内で装備される隊は、此の三つの問題の理想と現実とのハンディキャップの大ききの為に非常に困惑を感じるものである。しかしながら帰国してからは次のように考えている。即ち一部に言われるように何もかも理想的にやる必要はないわけで、先に挙げた問題の故に遠征が不可能になる。又は遠征をそれ故に断念させられる等は本末転倒であろう。実際又此の問題はチームの構成如何、或いはチームの目的如何によってはどうでも良い問題であろうと思う。例えば日本雪男探検隊のように或る部落を中心に短期間の旅行を繰り返すようなチームにとって完成レーション等は必要なからうし、又お互いに未知の隊員で構成されればチームがダイヤモンドを目指す場合には砂糖が30キロも入っている袋がゴロリとベースキャンプにあっても、食糧係が不在の折には一体どうすれば良いのか途方に暮れることもあろう——だから単独クラブが7,000 m前後、これは困難さをも含めて高さとして表現するのだが、そのような山を目指す場合には「献立、レーション、梱包」という問題はさほど神経質に考えなくとも、現地へ着いてからのチームワークが充分解決してくれることである。現に胡椒の入らないラーメンを食べてもまた結構楽しいものであったから。そんな事よりも遠征を計画するチームは先ず出掛ける算段をするのが最も必要であろうと思う。

次いで現地で実際に困惑したのは、嗜好飲料を非常に多量に必要としたということである。此の事は出発前に既に考慮した積りであったが、実際にその場に当たってみると砂糖の消費量、紅茶、ジュース類の消費量が予想を遙かに上まわるものであった。

我々は1日の献立の中に1回の嗜好飲料を組入れ、それ以上のものはその他の嗜好品と共にスペシャルパックとキャンプレーションとした。だから後掲の表の量の等量近くがスペシャルパックの中に入っていたのであるがそれでも少な過ぎたようだ。実際の数字を挙げるなら砂糖を必ず必要とする嗜好飲料品の場合、それを1日4回摂取するとして砂糖は1人1日当り150グラムから200グラムは必要とする。砂糖は印度との国境近くで安く入手出来たが、奥地へ行くと非常に高価なものになり、ナムチュバザールの下、ドウドコシ流域で1シュル(1キログラム弱)300円程する。我々は砂糖をダーランバザールで出発前買い足したがそれでも結構不足した。

次に現在迄2,3の遠征隊に使用された冷凍乾燥食品について述べるならば、これ等は我々の食品の原料面での合理化を大いに満足させてくれた。此の処理方法は食料保存法の理想に近く、栄養面に於いても完全に近いと言ってよく、その乾燥度は蛋白質性生鮮食品の重量の1/3、野菜では実に1/20程度になってしまう。しかも生の原料の味覚的特性も残存されるので、嗜好面でも我々の要求を9分通り満足させてくれた。例えばなめこのぬるぬる、とろろ芋のとろろさ、ねぎ類の特有の芳香が全て保存復元されるのである。

これらは日魯漁業株式会社と大洋漁業株式会社に全面的にお世話になった。更に原則的な問題については農学博士木村進氏に多大の御指導をお願いしたのでこの紙上を借りて深く感謝の意を表す。

唯、此の方法による一大欠点の第一は長途輸送に不向きであることだが、我々が使用した限りでは他の点でそれを補って余りある好結果が得られた。第二は脂肪を嫌うため肉類の乾燥の際脂肪をほとんど全部分離する必要がある。又動物性蛋白質に於いては、高所用に使用する場合沸点低下の問題から、消化吸收を助ける為予めハーフボイルにする必要があり、後にこの方法を適用した。

今此处で実際に使用したものを列記して、全製品に関して簡単な考察を試みよう。

表 1

品 目	処理前の状態	復元性	嗜好	料理の 難 易	細 包
牛 肉	ハーフボイル	—	##	—	ティンフォイル
鯨 肉	ハーフボイル	—	—	—	ポリエチレン二重包装
蛇	生	##	##	++	ティンフォイル
	ハーフボイル	+	++	+	ティンフォイル更にボール箱詰
大 鰯	ハーフボイル	+	+	+	ティンフォイル
鮭	ハーフボイル	+	+	+	ティンフォイル

備考 ## 最良, ++ 良, + 少々良, — 少々悪い

以上は総じて優れた食品であったが、其の中での優劣の比較であるから此の様な結果が出た。輸送に対する問題は前述の様に大きな欠点とされていたが、我々の場合では全く心配なく完全に保たれていたが、大鰯、鮭は薄板状の切片のため可成崩れたものも混っていたが中には完全なものもあった。これらのパックの大部分はティンフォイル包装(アルミ箔とセロファンを密着させたものを更にポリエチレンにて被覆した包装材料を用いたもの)であったが、一部分はポリエチレンの二重包装も使用した。其の中で前表の蛇の項の如くティンフォイル包装を更に緊密にボール箱詰にしたものが特に秀れていた。

次に野菜について述べよう。野菜の冷凍乾燥品は全て日魯漁業食品加工課製であった。

表 2

品 目	形 状	復 元 性	嗜 好	保 存 度
玉 ね ぎ	縦 切	##	##	—
長 ね ぎ(莖)	輪 切	##	++	—
長 ね ぎ(葉)	横 切	++	+	—
人 参	短 冊 切	+	##	+
ほうれん草	横 切	++	##	+
生 椎 茸	縦 切	++ 干椎茸程度	##	##
な め こ	原 形	+	##	##
白 菜	横 切	##	##	—
キ ャ ベ ツ	縦 切	+	+	++
と ろ ろ 芋	すり下し	##	##	++

備考 ## 最良, ++ 良, + 少々良, — 少々悪い

我々は以上の冷凍乾燥野菜の外に、今まで通常の山行で使われていた乾燥野菜を多量に携行した。併し嗜好の点では全く問題にならない程前者が秀れ、其の為に後者はその約半分量が余ってしまった。実際冷凍乾燥野菜を口にすると、風味の点からも旧式の製品は喉を通らなくなってしまいう程であった。但し之等冷凍乾燥野菜は完全に乾燥しているので、輸送の問題については今後に残された課題であろう。しかし乍ら或る程度の解決策としては、之等を包んだティンフォイル材の上を更にキャラメル製の箱状のものでくるみ、内側の形と外装の箱とを密着させ、内容をコンパクトにすれば輸送中の破損は相当程度防げられると思われる。

他の食品について特に言及しなければならないのは、ベーコン、ソーセージ類の保存法である。我々はこの2品目に関しかなり失敗させられ、ソーセージの一部は腐敗がひどく、食用にはたえられずに投棄せざるを得なかった。従ってソーセージは普通の倍量程スモークし、更に塩分量も倍加する必要性を感じた。ベーコンは急ぎ

製造させたためスモーク度が薄く、辛うじて食用に出来る程度であった。この包装はセロファンとポリエチレンの二重包装したものを更に摂氏60度で滅菌したものであったが、保存をよくする為には滅菌温度を上げるよりも寧ろソーセージ同様スモークと塩分量の増加を計った方が良いと考える。

次に献立のサンプルを掲げる。この献立は食糧計画を立てるに当って作ったもの(表3)であり、実際の使用

表3. Ration-B 1人日

品目	g	caj	蛋白	品目	g	cal	蛋白
α 米	240.0	861	17.0	ジュース素	21.0	78	0.1
削節	3.5	12	2.6	砂糖	58.0	227	—
ヤサイ	10.0	18	—	α 米	320.0	1,106	23.0
ホタテ	25.0	26	5.6	アサリ	29.0	26	4.4
カレールー	20.0	111	3.0	ヤサイ	10.0	18	—
バター	26.0	190	0.2	粉乳	22.0	109	5.6
椎茸	2.3	—	0.2	マッシュポテト	15.0	52	1.2
サラミソーセージ	35.0	199	10.7	グリーンピース	7.0	—	—
赤貝	20.0	21	3.6	ベーコン	14.0	90	0.7
乾パン	200.0	745	20.0				
バターアメ	22.0	79	0.1				
甘納豆	35.0	107	2.4	計	1,134.8	4,075	100.4

は各隊員の嗜好に委せたので、登山中に食事をした形とはかなりの隔りがある。

此の献立量が17人日量となると次の様なパック(表4)になる。但し主食は別で之の上に加えねばならない。

表4. Ration-B 17人日

品目	包装	単量(g)	個数	品目	包装	単量(g)	個数
α 米	ポリエチレン	160	12	ガーリック	瓶	10	1
カンパン	"	220	5	胡椒	"	50	1
ピーナツクラッカー	"	80	4	旭味	ポリエチレン	40	1
カレールー	"	30	10	"	"	20	1
"	"	50	1	塩	"	150	1
粉末ジュース	"	20	18	砂糖	"	500	2
ヤサイ(ネギ)	"	150	1	グリーンピース	缶	130	1
"(キャベツ)	"	200	1	バター	"	225	2
削節	"	20	3	コンソメスープ	チューブ	36	9
甘納豆	"	100	6	スキムミルク	ポリエチレン	375	1
ベーコン	"	240	1	赤貝	缶	170	2
バターアメ	缶	315	1	サラミソーセージ	ポリエチレン	200	3
ホタテ	"	210	2	シイタケ	"	40	1
マッシュポテト	ポリエチレン	250	1				

此れらの表を批判して頂くことは我々の今後の遠征の為に非常に有難いと思う。実際の処この計画実現に当っても種々問題はあった。先ず重量の問題である。これは是非解決しなければならない。計算量で1人1日量を1キログラムに押えることは最も重要なことであろう。又我々の目標とする山の状態、主に高度の点を考えて、マナスル遠征隊の様なハイキャンプレーションは作らなかつた。今回のそれに相当するものはマナスル隊のミド

ルキャンプレーションのようなもので充分であった。このレーションでは、主食をオートミール、アルファ米とソーダクラッカーにしたが、オートミールは結果として喜ばれず、殆どどの隊員がアルファ米を食用した。従って6,000 m 台のキャンプでは高度の影響による食欲の問題はあまり考慮する必要はないのかも知れない。我々の最終アタックキャンプは雪洞であったが、此の時はストーブを持参せず、ほんの仮眠程度の支度であったので、第4キャンプの食糧の中から登頂隊の好みに合うものを携行して貰った。彼等の持って行ったものは大体次のようなものである。

クラッカー少量、チョコレート数枚、果実缶詰、煉乳、この様なものでしかなかった。更にこれらの他に嗜好品と、嗜好的副食品(菓子類、飲料、漬物、海産物、果実缶、調味料)の入ったスペシャルボックスを各キャンプに配置し適当に摂取させた。この方法は非常に好影響をもたらしたと確信している。

表5. 国内で取揃えたものの内訳

用途別	実ポーター携行量 (kg)	内容量 (kg)	人日数概算	内容量/人日 (kg)
キャラバン	215.7	182.2	13人×(15日+15日)390人日	0.45
登山	1,082.4	943.6	13人×(45日+7日)÷680人日 (7日は予備日数)	1.39
総量	1,298.1	1,125.8	1,070人日	—

表6. 人日当 1.39 kg の内訳

	基本レーション (kg)	スペシャル (kg)	ベースキャンプスペシャル (kg)	総量 (kg)
重量	793.6	109.8	40.2	934.6
1人日当りの量	1.167	0.161	0.059	1.39

前表で1人日当りの量が1.167キログラムあるのは重すぎる。此の点、各食品の量を再検討する必要性を感じた。主食の点で言えることは、乾パン量を50グラムは減らすことが出来る、ということのみで、例えばアルファ米を朝晩各1袋にする(240グラム減)などという宣言をしたら、北大からは1人も遠征にゆかなくなるのじゃないかと思われる程今度の遠征隊員は良く食べた。アルファ米量の増加は必然的に副食品の増加をもたらした。

表7. 主食の組合せ

A	レーション	α	米	240	グラム	カンパン	220	グラム	α	米	320	グラム	B.C.	C I
B	レーション	α	米	240	"	カンパン	220	"	"	"	320	"	C II	C III
C	レーション	α	米	240	"	カンパン	220	"	スパゲッティ	200	"	"	B.C.	C I
D	レーション	α	米	240	"	カンパン	220	"	中華ソバ	200	"	"	C III	C II
E	レーション		オートミール	150	"	カンパン	220	"	α	米	240	"	C III	C IV
AA	レーション		オートミール	150	"	クラッカー	130	"	"	"	160	"	最高所 キャンプ	

これらのうちで全く腸の目をみなかったのがオートミールである。オートミールの分はほとんどアルファ米で消化された。第3キャンプ(6,300メートル余)でも、油っこいものを要求されたが、これには実際驚かされた。

現地で購入したもの。

米		ダーラン、サルパ峠近くグーデル、ナルパヤ、レグアガート	約 130キロ
砂	糖	ダーラン、レグアガート、ヤクビルタ	約 38キロ
麦	粉	ダーラン	約 35キロ
じゃがいも		パンボチエ、ナムチエバザール、その他各所(帰路のみ)	約 50キロ

とうもろこし(干)	ドウドコシ流域以下各所(船路のみ)	約 10キロ
とうもろこし(生)	ヤクビルタ, レクアガート(船路のみ)	約 8キロ
緑色野菜	ダンクータ(往)他各所(船路)2種類	約 10キロ
ニンニク	各所	約 0.5キロ
卵	各所	約 100コ
山羊	パンボチエ, サルバ峠の番小屋	2頭
鶏	グーデル(往復), パンコンワ, ダンクータ, デイアレ等	15羽
ブタ肉	ダンクータ・バザール, ダーラン・バザール	約 20キロ
牛乳	サナム近くの番小屋, サルバラ近くの番小屋, エクラデカルカ, デインボチエ	約 10リットル
ギー(粗製)	グーデル(往)	約 4リットル

## IX. 薬 品

中野征紀・小林年

今回の我々の遠征では、幸いにも大きな病気がなかった。隊員の中では、じん臓障害が2例と悪性の下痢が1例、そして軽度の雪盲が1例あっただけだ。インド及び低地ネパール滞在中も、軽度の下痢をするものがあった程度だ。飲料水殺菌剤、逆性石鹼、止血剤、下剤、麻酔剤等はまったく使用しなかった。蚊の見られる地帯では、抗マラリヤ剤を服用していたので、マラリヤには誰もかからなかった。キャラバン中、登攀期を通し、適時ビタミン剤を服用していた。この他軽度の風邪薬、整腸剤を時々服用する者があった位だ。帰りのキャラバンでは、民家に泊る機会があったので、しらみ、のみの駆除にBHC(駆虫剤)が有効であった。シェルパ達も大体隊員と同程度であったが1例だけ、激しい歯痛を訴えた者がいた。

ポーター達は、1例が扁桃腺炎、1例が軽度の捻挫で、帰りのキャラバンで1人マラリヤ患者がいた。あとは風邪、頭痛、腹痛を訴える者が時々いたが、どれが本物なのか判らない時もあった。後は軽度の外傷を受けた者が出た。

現地人にはほとんど投薬をしなかったが、脚を複雑骨折している者が居り、副木等は合理的なものをしてしたが、外傷部の手当が悪く、化膿していた者に出会った。

我々の場合、外用薬、感冒薬が多く利用され、その次にビタミン剤、整腸剤が使われたのが目立ったが、その他は余り利用されずに済んだ。勿論凍傷等は全然問題でなかった。高山病に対しては重要な症状が無かったことにもよるが、頭痛に対する鎮痛剤、不眠に対する催眠剤の如きは殆んど用いずに済んだ。これは勿論隊長の指示で薬品服用の為に高度順化の遅れることを考慮した為でもあった。尚酸素については最初から医療用としての考えで持参したもので、登攀用としては考慮していなかったのだが、登攀用としても又医療用としても使用する必要がなかった。

薬品リスト			
スルファ剤		テトラサイクリン	40カプセル
スルファ・チアゾール	500錠	アクロマイシン	100錠
スルファ・チメトキシ	200 "	複合ストマイ	10本
抗生物質製剤		カナサイクリン	40カプセル
懸濁水性プロカイン(300万単位)	10本	テラマイシン	100gr
シンシリン(20万単位)	100錠	トリコマイシン	50 "
クロラム・フェニコール	160 "	感冒薬	
バイシリンV2	40 "	総合感冒錠	200錠
		ペンザ	200 "

抗ヒスタミン剤	
レスタミン錠	5本
レスタミン注	50 "
ヒベルナ	100錠
ピレチア錠	500 "
ピレチア注	30本
ペリアクチン	80錠
鎮静剤	
アトラキシン	200錠
催眠剤	
プロバリン	150錠
アドルム	50 "
イソミン	100 "
鎮痛剤	
グレラン	100錠
イルガピリン	50 "
ザクチリン	40 "
ロートエキス	25 gr
鎮咳剤	
フスタギン	500 gr
メジコン	60錠
プロチンコデイン	500 cc
アスドリン	60本
アスドリン S	60 "
強心剤	
アンナカ	10本
ビタカンフエナール	15 "
フジカンフエナール	10 "
テラプチク	5 "
ネオファイリン	10 "
強力ネオファイリン	5 "
モノファイリン	10 "
ジキタミン	10 "
止血剤	
マネトール	10本
トロンボゲン	20 "
ピタシミン	10 "
カチーブ	10本
健胃消化剤	
SM 散	500 gr
ビスマ散	500 "
アルミ・ゲル	200錠
ピオフィエルミン	500 "
リパーゼ	500 gr
重曹	1,500 "

下 剤	
硫酸マグネシウム	500 gr
ラキサトール	25 "
止血吸着剤	
アドソルピン	500 gr
エンテロビオホホルム	200錠
ビタミン剤	
総合ビタミン	120錠
パンビタミン	200 "
アリナミン	100 "
ピオタミン	500 "
マルタミン	250 "
マルビタール	250 "
ミルカル	240 "
ビタフレックス	500 "
ビタミンC	100 "
チョコラA	100 "
ニコチン酸	100 "
ベカドロン	8本
強肝剤	
グロンサン	500錠
チオクタン	360 "
パ ン ト	300 "
ウ ル ソ	500 "
ブドウ糖	50本
麻酔剤	
カルボカイン	5本
イソゾール	5 "
イソミタール	5 "
鎮吐剤	
トラベルミン	60錠
ピーゼットC (2 mg)	60 "
" (40 mg)	40 "
" 注(2 mg)	10本
外用薬	
複合軟膏	100 gr
オロナイン	250 gr
サロメチール	300 "
レスタミン	500 "
アクロマイシン	30 "
エ          マ	220 "
エマホルム	300 "
塗布剤	
マーキユクロクロム	250 gr
ヨードチンキ	250 "

消毒剤	
オスバン	500 cc
パンモール	500 "
クリニゾール	500 gr
アルコール	1,000 cc
DDT	275 gr 1,560 kg(紙筒詰)
BHC	600 gr
VPリンデン	900 gr 1,120 gr(紙包)
バルサン	50本
ラリンSP	200 gr
凍傷剤	
イミダリン	20本
ユベラ	300 gr
カリクレイン	30錠
ヘキサニシット	60 "
眼科用	
クロロマイシン	30 cc

テラマイ	28 gr
抗マラリヤ剤	
塩酸キニーネ	500錠
アテブリン	100 "
プロキニーネ	100 "
その他	
チンク油	1,000 gr
珪酸	500 "
飲用水殺菌剤	500錠
食塩錠	500 "
ホータイ	10本
ガーゼ	4包
脱脂綿	1,000 gr
酸素	
酸素セット(ボンベ2本付)	1 12 kg
酸素ボンベ	4 20 "
附属部品	1 1 "

X. 会 計

北大ヒマラヤ遠征隊会計

収入の部	
山の会 山岳部	98万円
隊員負担	190
同窓会関係	98
一般法人	274
本州製紙関係	46
山岳団体	44
雑収入	11
計	761万円

支出の部	
装備費	154万円
食糧費	16
写真材料費	25
梱包輸送費	23
交通費	24
札幌事務局費	40
東京事務局費	39
保険登山料	24
外貨分(遠征隊持参)	412
計	757万円
残	4万円

費 目	予 算	決 算	備 考
飛行機旅費	1,016,064円 (2,822.4)ドル	1,498,625円 (4,162.8)ドル	
外貨分			
1. 交通費	1,518.80ドル	890.79ドル	消費税を含む
2. 滞在費	1,057.50	850.55	
3. 荷物輸送費	851.55	1,441.15	
4. 通信費	100.00	114.49	
5. シェルパ・リエゾン	1,148.90	1,438.88	

費 目	予 算	決 算	備 考
6. ポーター費	1,497.60	1,947.40	
7. ネパール入国料	208.00	208.00	
8. キャラバン費	171.60	296.80	
9. 現地食糧購入費	348.00	104.90	
10. 予備費	1,000.00		
計	7,901.96ドル (2,844,706円)	7,292.96ドル (2,625,466円)	

費 目	予 算	決 算	備 考
1. 交 通 費			
イ 円 払 分	羽田～バンコック (往復) 145,152円×7人 =1,016,064円	羽田～ピラトナガール (往復) 5人 羽田～カトマンズ～ピラ トナガール (往復) 2人 1,471,500円 送金手数料他 27,125円	
ロ 外 貨 分	バンコック～カルカッタ (往復) 166.4ドル×7人=1,164.8 カルカッタ～ピラトナガール 38.80ドル×5=194.00 カルカッタ～カトマンズ 59.40ドル×2=118.80 カトマンズ～ピラトナガール 20.60ドル×2=41.20	カトマンズ～ピラトナガール (往復) 22.2ドル×6人=133.2 カルカッタ～ピラトナガール 8.5ドル×4人=34.0 ピラトナガール～カルカッタ 103.37ドル×7人=723.59	リエゾン2往復を含む 汽車旅行 復路カルカッタ滞在費の一部を使用
小 計	1,018,064円 1,518.80ドル	1,498,625円 890.79ドル	
2. 滞 在 費			
カルカッタ (往)	7.35×5人×10日=367.50 7.35×5人×10日=102.90	5.0×2人×15日=150.0 5.0×2人×9日=90.0 5.0×3人×8日=120.0 2.0×1人×6日=12.0 2.0×1人×11日=22.0	コック サーダー
カトマンズ (往)	8.50×2人×3日=51.00	9.40×2人×3日=56.40	
ピラトナガール (往)	4.20×7人×2日=58.80	160.93	ピラトナガール、ダーラン、フスレと分宿
ピラトナガール (帰)	4.20×7人×2日=58.80	38.22	フスレ、ピラトナガール知人宅に宿泊
カトマンズ (〃)	8.50×2人×3日=51.00	8.00×3人×2日=48.00	
カルカッタ (〃)	1.35×5人×8日=294.00 7.35×2人×5日=73.50	3.0×51人日 153.00	
小 計	1,057.50	850.55	
3. 荷物輸送費			

費 目	予 算	決 算	備 考
カルカッタ 通関料(往)	84×2.5トン=210.00	303.18	(含む手数料)
(復)	84×1.2トン=100.80	118.90	( " )
カルカッタ～ピラトナガール自動車便	168.40	329.09	( " )
ピラトナガール～ダーラン自動車便	83.20	31.85	
ピラトナガール通関料(往)	27.40	63.69	
ダーラン～ピラトナガール自動車便	83.20	38.22	
ピラトナガール通関料(帰)	13.15	439.49	消費税
ピラトナガール～カルカッタ自動車便	165.40	116.73	
小 計	851.55	1,441.15	
4. 通 信 費	100.00	114.49	
5. シェルパ・リエイゾン			
サ ー ダ ー	2.10×1人×80日=168.00	2.38×1人×120日=285.6	
コ ッ ク	1.47×1人×80日=112.60	1.64×1人×78日=127.92	
シ ェ ル パ	1.25×3人×80日=300.00	1.17×3人×70日=245.7	
ローカル・ポーター	0.941×4人×75日=282.30	0.94×3人×70日=197.4	
"		0.94×3人×80日=225.6	
シ ェ ル パ 旅 費	19.40×5人×5日=97.00	21.23×2人 = 42.46	
"		3.5×6人 = 21.00	
" 宿泊費	1.05×5人×4日=21.00	1.1×7人×16日=123.2	
リ ェ イ ゾ ン	42.00×4ヶ月=168.00	42.50×4ヶ月=170.00	
小 計	1,148.90	1,438.88	
6. ポ ー タ ー 費			
ダーラン～BC	0.832×80人×15日=998.40	0.81×1540人日=1247.4	29日間
BC～ダーラン	0.832×40人×15日=499.20	0.70×650人日=455.00	ナムチェバザール経由 27日間
		0.70×350人日=245.0	荷物輸送隊 15日間
小 計	1,497.60	1,947.40	
7. ネパール入国料	208.00	208.00	
8. キャラバン費			
隊員・リエイゾン(往)	0.246×8人×15日=29.52	}0.4×20人×29日=232.00	
シ ェ ル パ	0.123×5人×15日=9.23		
B C 滞 在 中	0.123×17人×45日=94.10		
隊員・リエイゾン(帰)	0.246×8人×15日=29.52	}1.3×8人×27日=64.8	
シ ェ ル パ(〃)	0.123×5人×15日=9.23		
小 計	171.60	296.8	
9. 現地食糧購入費	348.00	104.9	
10. 予 備 費	1,000.00		

## XI. 遠 征 隊 日 誌

久 木 村 久

- 昭和37年3月23日 中野隊長以下全員、羽田空港よりタイ航空機にて出発、香港にて一泊。
- 24日 ダムダム空港着、リットンホテルに入る。
- 29日 小林・永光・安間、汽車にてピラトナガールに向う。
- 30日 中野隊長・久木村、空路カトマンズ着。小林・永光・安間、ピラトナガール着。
- 4月2日 中野・久木村、マニク空路ピラトナガール着、小林らと合流。
- 6日 岡本・鈴木、カルカッタより空路ピラトナガール着。
- 9日 カルカッタより遠征隊荷物ジョグバニ着。岡本・久木村、マニク印度国内保税手続不備の為交渉にブルネア、バンマンキの税関に出頭。
- 12日 久木村、マニク再度カトマンズへ飛び、荷物のネパール搬入の交渉、小林・永光・安間、ピラトナガールで合流したシェルパ全員を連れダーランに先発。
- 14日 久木村、マニク、ピラトナガール着。
- 15日 通関を済ませて、中野・岡本・久木村・鈴木、マニク、荷物と共にトラックにてダーラン、フスレヒル着。
- 16日 荷物の小分け作業。
- 17日 全隊員、シェルパ、約100名の入夫と共にキャラバン開始、ムルガハト橋の下で泊る。
- 18日 ムルガハトよりダンクータ郊外のカガテダクタボカリ着。岡本・久木村・マニク、ダニクータのガバナーと会見。
- 19日 ダンクータよりバクリバースパワガオンをへてデュクレカルカ泊。
- 20日 デュクレカルカよりベラドケンツァヌア泊。先発隊として岡本・安間、ラクパツエリン・フルキパガ入夫数名を連れ先行し本隊と別行動となる。
- 21日 ベラドケンツァヌアよりサヨコーラ泊。
- 22日 サヨコーラよりティムリントールを通り、(ここで初めてチャムラン・マカルー等の偉容に接する)渡船にてアルン河を渡りペティガオン泊。先発隊より連絡があり、安間猛烈な下痢に悩まされているので永光と交代し先行する。本隊は途中安間を拾う。
- 23日 ペティガオンよりイルカコーラ泊。
- 24日 イルカコーラよりフェディガオン泊。
- 25日 フェディガオンよりサルバ峠直下泊。
- 26日 サルバ峠直下より峠を越え、グーデル泊。ここでダーランから来た人達を全部シェルパ人の入夫に換える。先発隊はホンゴコーラに入りマンゲンコーラ泊。
- 27日 グーデルよりホンゴコーラに入りチェスカンをへてチェミシン泊。道はホンゴコーラよりはるかに離れた左岸の尾根道である。
- 28日 チェミシンよりウタカルカをへてマンゲンコーラへの降り口に泊る。
- 29日 前夜のキャンプ地よりマンゲンコーラ泊。先発隊の岡本と道案内が降りてくるのに会う。
- 30日 マンゲンコーラよりソルブコーラルブン泊。先発隊の永光が、久木村と交代し、岡本・久木村・アングェル、道案内のバルドウールが先発する。
- 5月1日 ソルブコーラルブンよりホングルブン泊。途中残雪の為にロープを固定し入夫が歩き易くする。
- 2日 ホングルブン停滞して、ロープの固定、荷物のビーダーコンメンを行う。残雪が多い為に落伍する入夫が相つぎ、90名の入夫は半分の45名になってしまった。先発隊はホングルブンより峠を一つ越したワテルマコーラルブン泊。
- 3日 ホングルブンより、先発隊はワテルマコーラルブンより峠を越しホンゴコーラに入り、沢の上の岩小屋泊。
- 4日 ワテルマコーラに停滞、荷物の往復荷上げを行なう。先発隊、前夜のキャンプ地よりホンゴコーラ左岸に渡り、グミツオールカルカをへてメラカルカ泊。岡本の体の調子が悪くなる。
- 5日 中野・鈴木・安間、少数の入夫と共にワテルマコーラルブンよりホンゴコーラに入る。小林ワテルマコーラルブンに残り荷上げの監督。永光食糧買い出しの為にチェスカンへ戻る。先発隊の久木村、メラカルカより引き返しホンゴコーラルブン泊。
- 6日 中野・久木村、ホンゴコーラルブンよりメラカルカ泊。鈴木・安間、ホンゴコーラルブンに止り荷上げを監督。小林、マニクワテルマコーラルブンよりホンゴコーラルブン泊。
- 7日 中野・岡本・久木村、メラカルカ停滞。通称

- “病院テント”安間ホングコーラルブンよりメラカラカ泊。小林ホングコーラルブン着。
- 8日 中野・久木村・安間、ベースキャンプ迄往復荷上げ。
- 9日 小林・鈴木、ホングコーラルブンよりメラカラカをへて、久木村・安間と合流しベースキャンプ建設、同泊。
- 10日 小林・久木村・鈴木、ベースキャンプを出、チャムラン西面に偵察のための仮第一キャンプを建設。中野・岡本、“病院テント”に停滞、安間・サダー、ベースキャンプ停滞。永光チェスカンより病院テント泊。
- 11日 小林・久木村・鈴木仮第一キャンプよりチャムラン西面を偵察。中野・岡本・永光・マニク“病院テント”よりベースキャンプ入り。ほぼ全部のシェルパ、荷物がベースキャンプに集結した。
- 12日 中野・岡本・安間・マニク・サダー、ベースキャンプに停滞。永光・アンノルブ、ベースキャンプより仮第一キャンプに入る。小林仮第一キャンプよりベースキャンプへ連絡に降る。久木村・鈴木仮第一キャンプで停滞。ライバゲルブ・アンゲルブ、ベースキャンプ。仮第一キャンプ間を往復荷上げ。
- 13日 中野、ベースキャンプより仮第一キャンプ泊。岡本・小林・安間・サダー・マニク、ベースキャンプ停滞。永光・久木村・鈴木・アンノルブ、チャムランの北西面及び北面を偵察。久木村連絡の為にベースキャンプへ降りる。フルキバ・ラクパツエリン・カミバサン、ベースキャンプより仮第一キャンプへ往復荷上げ。
- 14日 小林・久木村・サダーのベースキャンプよりチャムラン南尾根に入る沢を登り氷河を偵察、後にこれが登路となる。この氷河の舌端に新しい第一キャンプを建設。中野・永光・鈴木・仮第一キャンプを撤収ベースキャンプ泊。岡本・小林・久木村・サダー新第一キャンプ泊。アンゲルブ・ラクバゲルブ・ニマナムギャル、第一キャンプへ荷上げして泊。
- 15日 小林・久木村第一キャンプより第二キャンプへルート工作。第二キャンプ建設して泊る。永光・ラクバゲルブ・アンゲルブ、第二キャンプへ荷上後第一キャンプへ降る。岡本第一キャンプ停滞。安間ベースキャンプより第一キャンプ泊。中野・鈴木・マニク、ベースキャンプ停
- 滞。(以後中野・マニクは特に記載ある迄ベースキャンプに停滞)
- 16日 小林・久木村アイスフォールのルート工作。永光・安間・アンノルブ第二キャンプに入る。岡本・鈴木・サダー、ベースキャンプより第一キャンプ入り、アンゲルブ・ラクパツエリン・ラクバゲルブ、ベースキャンプより荷上げて第一キャンプ入り。
- 17日 岡本・鈴木・サダー第一キャンプ、第二キャンプ間を荷上げ往復。永光・安間ルート工作第二キャンプ泊。小林・久木村第二キャンプよりベースキャンプへ降り休養。
- 18日 岡本・鈴木・サダー第一より第二キャンプ泊。永光・安間・アンノルブ、ルート工作。ラクバゲルブ・アンゲルブ第一より第二キャンプへ往復荷上げ。中野ベースキャンプより第一キャンプ泊。
- 19日 永光・安間第二より第一キャンプ泊。安間雪眼となる。岡本・鈴木・サダー・ルート工作。小林・久木村ベースキャンプより第一キャンプ泊。
- 20日 岡本・鈴木・サダー・アンゲルブ第二キャンプより稜線に上り、第三キャンプ建設。永光第一よりベースキャンプへ休養に降る。小林・久木村、ラクバゲルブ第一より第二キャンプ泊。中野・安間第一キャンプにて停滞。アンノルブ・ラクパツエリン第一・第二キャンプ間を往復荷上げ。
- 21日 小林・久木村第二キャンプより第三キャンプ泊。岡本・アンゲルブ第三より第二キャンプ泊。ラクバゲルブ第二・第三キャンプ間往復荷上げ。鈴木・サダー第三キャンプ上部工作。
- 22日 鈴木・サダー第三より第一キャンプへ降りる。小林・久木村キャンプサイト作り、第三キャンプ停滞。アンゲルブ・ラクバゲルブ第二・第三キャンプ間往復荷上げ。
- 23日 中野・岡本第二より第三キャンプ泊、久木村第三キャンプより第二キャンプ泊。アンノルブ・ラクパツエリン第二・第三キャンプ間往復荷上げ。小林第三キャンプ停滞。永光・安間・アンゲルブ、ラクバゲルブ第一より第二キャンプに泊。
- 24日 岡本・小林ルート工作後、小林第二キャンプに降る。永光・安間・サダー・ラクバゲルブ第二より第三キャンプ泊。鈴木、第一より第二キ

- キャンプ泊。久木村第二キャンプ停滞。
- 25日 岡本・安間・永光・サーダー、ルート工作。小林・久木村・鈴木・アンノルブ・ラクパツェリン第二より第三キャンプ泊り。中野第三キャンプ停滞。隊長以下全隊員が第三キャンプに集結した。
- 26日 安間・鈴木ルート工作。小林・久木村第三より第四キャンプ泊。岡本・サーダー・ラクパツェリン・アンノルブ第三・第四キャンプ間を往復荷上げ。永光第三・第二キャンプ間往復荷上げ。ラクバゲルブ、フルキバ第二・第三キャンプ間往復荷上げ。アングェルブ歯痛でベースキャンプに降る。
- 27日 小林・久木村第四キャンプの上部をルート工作。第四キャンプを上部に移す。岡本・サーダー第三より第四キャンプ泊。ラクパツェリン・ラクバゲルブ第三・第四キャンプ間を往復荷上げ。中野・永光・鈴木第三キャンプで停滞。
- 28日 岡本・小林・久木村第四より第三キャンプ泊。永光・安間・鈴木第三より第四キャンプ泊。サーダー第四キャンプ停滞。ラクバゲルブ第三・第四キャンプ間往復荷上げ。中野・ラクパツェリン第三より第一キャンプ泊。
- 29日 永光・安間・鈴木・サーダー、ルート工作、第四キャンプ泊。岡本・小林・久木村第三キャンプ停滞。
- 30日 安間・サーダー第四キャンプを出て上部に雪洞を掘り泊る。岡本第三より第四キャンプ泊。永光・鈴木第四キャンプに停滞。
- 31日 安間・サーダー雪洞より頂上に到り第四キャンプ泊。小林・久木村第三より第四キャンプ泊。岡本・永光・鈴木第四より第三キャンプへ降る。中野第一キャンプ停滞。アンノルブ・ラクパツェリン第三・第四キャンプ間往復荷上げ。
- 6月1日 安間・サーダー第四より第二キャンプ泊。久木村・小林第四キャンプ撤収して第三キャンプ泊。岡本・永光・鈴木第三キャンプ停滞。ラクパツェリン・ラクバゲルブ第三・第四キャンプ間を往復荷物下し。
- 2日 岡本・小林・久木村第三より降り、第二キャンプで安間・サーダーと合流。第一キャンプで中野と合流、ベースキャンプへ降る。永光・鈴木・アンノルブ・ラクバゲルブ・ラクパツェリン・フルキバ第三キャンプを撤収して第二キャンプ泊。
- 3日 永光・鈴木・アンノルブ・ラクバゲルブ・ラクパツェリン・フルキバ第二キャンプを撤収して第一キャンプ泊。
- 4日 永光・鈴木第一キャンプよりベースキャンプに降る。サーダー及びシエルバ全員で第一キャンプを撤収してベースキャンプに降りる。全員がベースキャンプに集結、登頂祝を行なう。
- 8日 グーデルよりナイケに連れられて人夫44名ベースキャンプに登って来る。
- 9日 遠征隊の荷物はサーダー及びカミパサンに人夫を監督させてキャラバンの往路帰す事にし、全隊とフルキバ及びローカルポーターのソンジン15名の人夫に必要なキャラバン用品を背負わせ、ナムチェバザールをへて帰る事にする。シエルバはサーダー・カミパサン・フルキバ・ソンジンを除いて全員解雇する。帰路のキャラバン開始。ベースキャンプよりチャムラン西面の池の端泊。
- 10日 前夜のキャンプ地よりパンチボカリ泊。
- 11日 パンチボカリよりアムブ・ラブチャを越えてイムジャコーラ泊。
- 12日 前夜のキャンプ地よりチュクンカルカ泊。
- 18日 チュクンカルカに停滞。
- 14日 チュクンカルカよりパンボチエ泊。丁度ドウムジ(祭り)である。
- 15日 パンボチエよりタンボチエをへてナムチェザール泊。ナムチェもドウムジである。
- 16日 ナムチェバザールにて停滞。
- 17日 ナムチェバザールよりピチンガールガオン泊。
- 18日 ピチンガールガオンよりスルキヤガオン泊。
- 19日 スルキヤガオンよりチュトガオン泊。ここでフルキバとソンジンを解雇。人夫だけのキャラバンとなる。
- 20日 チュトガオンよりカルテガオンをへてパンコーマ泊。
- 21日 パンコーマにて停滞。久木村・安間カリコーラに往復。
- 22日 パンコーマよりガイカルカ泊。
- 23日 ガイカルカよりキラウンル泊。
- 24日 キラウンルよりグーデル泊。
- 25日 グーデルよりソナム泊。
- 26日 ソナムよりサルバ峠を越え、ジョルジャレカルカ泊。ここより往路のキャラバンルートはモンスーンの為に別の尾根すじの道をとらねばならない。

27日 ジョルジャレカルカよりジュゲカルカ泊。  
28日 ジュゲカルカよりエクラデカルカ泊。  
29日 エクラデカルカよりナルパヤガオン泊。  
30日 ナルパヤガオンよりヤクビルタ泊。  
7月1日 ヤクビルタよりアルン河を渡りレグアガード泊。  
2日 レグアガードよりデユクレ泊。  
3日 デユクレよりダンクータ泊。  
4日 ダンクータよりムルガハト泊。  
5日 ムルガハトよりダーランフスレヒル泊。キャラバン終了。サーダーと再会。  
9日 ダーランよりトラックでピラトナールに降りタバ家のバンガローに入る。  
15日 中野・安間・鈴木、カトマンズへ飛ぶ。  
17日 久木村ピラトナガール発。

19日 岡本・永光・小林ピラトナガール発。  
28日 全隊員カルカッタ・リットンホテルに集結、中野カトマンズ、ピラトナガール経由カルカッタ着。岡本カトマンズ、ボカラ経由カルカッタ着。小林・永光ダーズリン、ニューデリーを経てカルカッタ着。久木村ダーズリン、カリンボン、ガウハティ、シロンを経てカルカッタ着。安間カトマンズ、ニューデリーを経てカルカッタ着。鈴木カトマンズ・ネパールガンジ、パトナ、ニューデリーを経てカルカッタ着。  
31日 カルカッタ発、空路バンコック着。  
8月1日 バンコック発、空路香港着。  
3日 香港発。  
4日 羽田空港着。

	Temporary B.C.	BC	CI	CII	CIII	CIV	頂上
5月 8日		中,久,安					
9		年,轉,Sar 久,安	飯CI				
10	承	年,久,轉 年,久					
11		中間,承,L.O. 全Sherpa	年,久,轉	偵察			
12		承,AN LG,AG 中					
13		Pur,LT 中 久	年,久,轉,AN	偵察			
14		中,承,轉,AN 年,久,Sar 承,久 AG,LT,NN		偵察			
15		安 LT,AN,Pur,NN,KPL	年,久 承,AG,LG				
16		團,轉,Sar PT,Pur,KP,KT,NN,L AG,LT,LT PT,Pur,KP,KT,NN,L	承,安,AN	年,久			
17		年,久 PT,Pur,KP,KT,NN,L	團,轉,Sar AG,LT	承,安,AN			
18		中 PT,Pur,KP,KT,NN,L	團,轉,Sar LG,AG	承,安,AN			
19		承,安 AN,LT,LG 年,久	承,安	轉,Sar			
20		承 PT,Pur,KP,KT,NN,L	年,久 AN,LT	團,轉,Sar,AG			
21		PT,Pur,KP,KT,NN,L	AN,LT	年,久 承,AG 中	轉,Sar		
22		PT,Pur,KP,KT,NN,L 承	AN,LT AG	承,AG,LG	年,久		
23		PT,Pur,KP,KT,NN,L	Pur 承,安 AG,LT	中,承 久 AN,LT			
24		PT,Pur,KP,KT,NN,L	Sar 轉	承,安,LG 年	團,年		
25		Pur PT,KP,KT,NN,L	承,安 年,久,轉,AN,LT	承,安,Sar			
26		PT,KP,KT,NN,L	AG	LG,Pur 承	承,轉 年,久		
27		PT,KP,KT,NN,L		AN,Pur 團,Sar	年,久		
28		PT,KP,KT,NN,L	中,LT	LT,Pur AN	團,年,久 承,安,轉 中		
29		AG		LT,Pur	承,安,轉,Sar		
30		PT,NN	AG	Pur	AN,LG 團	承,Sar 團	
31					承,安,轉 AN,LT	承,Sar	
6月 1日					承,安 年,久 LT,LG		
2		AT,NN 中	團,年,久 承	承,轉,AN,AG,LT,Pur			
3		PT,KP,KT,NN,L	承,轉,AN,AG,LT,Pur				
4		PT,KP,KT,NN,L 承,轉,Sar,AN,AG,LT,Pur					

注：中：中野隊長  
團：團長  
年：小林 年  
承：承光隊  
久：久木村久  
安：安部 壯  
轉：鈴木良博  
L.O.：Liaison Officer  
(Manik Tulezhov)

Sar : Sards, Passang Putar III  
AN : Ang Norbu  
AG : Ang Gelbu  
LT : Lakpa Tzering  
LG : Lakpa Gelbu  
Pur : Purnkoo  
KP : Kami Passang  
KT : Karma Tzering  
NN : Nima Nangyal  
PT : Passang Tzering  
L : Linjing

High Altitude Porters  
Local Porters

